

「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探索

## 「データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文」から シェイクスピア＝ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探索 その四

草 薙 太 郎

### 1. はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデータベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れる。それを『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一<sup>1</sup>「その二」<sup>2</sup>としてまとめた。

その成果をもとに、シェイクスピア＝ベーコン説を検証することができるとし、一連の論文発表を計画・実行している。そのことを以下にまとめて提示したい。

データベースの分類項目と対応論文は以下の通りである。(分類項目を列挙し、その後に対応する発表論文名を提示する。)

#### (1) 移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

- (a) 心理学、臨床心理学などに関連するもの
- (b) 枠にとらわれない米国流自由研究
- (c) 映画に関連するもの
- (d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

以上のうち(a)(b)を『データベース: 米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する その一<sup>3</sup>としてまとめ、(c)(d)を「その二」<sup>4</sup>としてまとめる。

#### (e) 語学的考察に近いもの

---

1 富山大学人文学部紀要第40号 (2004).  
2 富山大学人文学部紀要第42号 (2005).  
3 富山大学人文学部紀要第44号 (2006).  
4 富山大学人文学部紀要第45号 (2006).

- (f) 実際に演じることからの論考
- (g) ホモセクシュアルに関わるもの

以上を『『データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その一」<sup>5</sup>としてまとめる。今回からシェイクスピア＝バーコン説を検証することであぶりだされる米国の特徴と、「2001. 9. 11のテロ」以来、世界的な問題となっている「テロ対策」とが、深い関係にあることに重点をおいて論じてゆく。

(2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴

- (a) 主として英国と関連するもの
- (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの
- (c) 西欧文化全体と関わるもの

以上を『『データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その二」<sup>6</sup>としてまとめる。

(3) 競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする（フェミニズムが典型）圧力のある特徴

- (a) フェミニズムに関するもの
- (b) 社会学的な考察をするもの
- (c) 政治に関わるもの

以上を『『データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その三」<sup>7</sup>としてまとめる。

さらに、「テロ対策」との関連を特に考えなかった (1) (a)(b)を本稿である「その四」<sup>8</sup>としてまとめ、(c)(d)を「その五」<sup>9</sup>としてまとめる。

なお、一連の論考は、随時更新されたデータの、発表時での最新データに基いている。

---

5 富山大学人文学部紀要第47号 (2007).

6 富山大学人文学部紀要第48号 (2008).

7 富山大学人文学部紀要第49号 (2008).

8 富山大学人文学部紀要第50号 (2009).

9 富山大学人文学部紀要第51号 (2009). (予定)

(a) 心理学, 臨床心理学などに関連するもの

病的なナルシズムを掲げシェイクスピアの『コリオレイナス』などを論考するもの<sup>10</sup>がある。母の育て方ゆえに他人と正常な関係を築けずエゴの肥大を成長と取り違い、病的なナルシズムゆえの悲劇とする。分析は一応妥当ながら「病的」と断じるところに特徴がある。歴史上の専制君主や強い軍人にはエゴを肥大させるナルシズムが多少なりともある。それを「病的」と断定しうるか、しないかは、旧世界への理解度、親密度によるのではなかろうか。米政府はイラクのフセインを「病的ナルシズム」「エゴの肥大」と断じたかもしれない。

このように「2001. 9. 11テロ」以前に書かれたものでも、後にアメリカのイラク攻撃と無縁ではないものがある。

ただし、それ以前は概ね、アメリカの個人の臨床心理学カウンセラーがステイタス・シンボルであったことを反映し、個人の悩みと関連するものが書かれる一方、文明論、文化論的なものも目立った。

例えばレトリックを心理学と言語学の結合として、シェイクスピアなどを分析するもの<sup>11</sup>がある。ブリュエールの『イカルの墜落』を扉に掲げ、臨床心理学的読みで、『尺には尺を』を捉えたり、デカルトやセルバンテスなどを例に、哲学と心理学の間を彷徨う論考<sup>12</sup>がある。これなどは西ヨーロッパの文化的伝統の特徴も併せ持つ。

このような考察は、かつては学位論文として沢山書かれた。しかし「2001. 9. 11テロ」以降、それは減り、代わってキリスト教にまつわるものが姿を現したように思われる。

分類項目「(2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴(c) 西欧文化全体と関わるもの」の中で「アフガニスタンのついでにイラクを叩いたと見えたことが、ブッシュ大統領の支持基盤にキリスト教原理主義的なものの存在が明らかになった」と述べた。その説明として、「ボーンアゲインといわれる大人になってからキリスト教を再確認して救われたためにキリスト教を文字通り信じるようになった人々がアメリカでは多いといわれる」と指摘した。

さらに、それは一種の現代人の悩み治療の一環という感覚が強く、本当に歴史を遡り原始キリスト教に立ち返ったわけではない。つまり、日本や西欧のように歴史感覚がある国ではあり

---

10 Keller, Michelle Margo, *A Study of Pathological Narcissism in Renaissance English Drama*, (1997). 富山大学図書館請求番号MF||198||12 (以下同様)

11 Czerniecki, Krystian Mare, *The rhetoric of melancholy : Shakespeare, Racine, Kleist*, (1991). 902.2||C99||Rh

12 Lezra, Jacques, *Icarus reading: trope, trauma, and event in Shakespeare, Cervantes, and Descartes*, (1990). 902||L59||Ic

得ない現象なのだ。それは「懐疑主義」に陥った現代人感覚からの脱却であり、「反・懐疑主義」とでも名付けた方がよいのかもしれない。それがイラク戦争の一因であり、「テロ対策」に各国が迫られる原因だとしたら、国際社会にとっても重要であるとも述べた。

つまり、かつては臨床心理学的にシェイクスピアを考察することで心の救いを得ていたアメリカ人が、臨床心理学よりキリスト教原理主義に乗り換えた現象が起こっているとも考えられる。

こうした問題を考えるため、前稿のようにアメリカの政治と社会を直接考える専門家の意見を参考にしてみよう。前稿と同様、形式的には文学論の引用と変わらぬ扱いをし、論旨の紹介にあたっては、あくまで文学研究者の能力の範囲内で正確を期したい。

精神分析に関する記述としては古矢旬の「戦後アメリカに隆盛をみた人文諸科学——性科学、精神分析、行動主義、エスペラント、論理実証主義から宗教的なエキュメニカルイズムにいたるまで」が「アメリカないしはアメリカ人を、普遍世界ないしは人類とほぼ同一視するまでに達する、底抜けの楽天的世界観」をしめしているとするもの<sup>13</sup>がある。

「楽天的世界観」によって精神分析学が戦後花開いたにせよ、そもそも精神分析学は西欧では受け入れられず、アメリカで受け入れられて初めて西欧でも認知された経緯がある。その経緯には宗教との関係も大きく影響している。カトリシズムという「宗教的なエキュメニカルイズム」が支配し、心の問題を取り扱っていた西欧で、フロイト、ユングといった精神分析学の流れが市民権を獲得するには、カトリック教会への挑戦が必要であった。ユングの著作にカトリック批判が頻出することも、このことを表している。

このことを踏まえ、まずは「2001. 9. 11テロ」を勘案する以前の論考を見てみよう。

「中年以後の鬱」という観点からの論考<sup>14</sup>は臨床心理学の応用である。影の領域へ入る完璧を求めたアンジェロ、おとなになることを拒絶するトロイラス、原始的魂アニマの女性ヘレナ（終わりよければ...）欠陥両親を持つ落胆（ハムレット）といった規定を行い、ユング的人生の不幸を克服する視点でのシェイクスピア論<sup>15</sup>がある。ユングは西ヨーロッパの文化的伝統に深く関るものの、臨床心理学の実践でユング派の活躍を想起させる点がアメリカの文化的ボーダーレス社会の特徴を示す。また主人公の自己客観化に寄与する良きカウンセラーを辿り、ハムレットにホレイショ、リアにケント、また『アントニーとクレオパトラ』のエノパバス、『コ

13 古矢旬、『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』, (2002), p.168.

14 Feak, Marcus David, *Aspects of Kleinian Life Span Psychology*, (1995). MF||189||7

15 Porterfield, Sally F., *Inner players: a Jungian reading of Shakespeare's problem plays*, (1992). 932||Sh||Po

リオレイナス』のメネニウスなどを分析するもの<sup>16)</sup>は、実践的な臨床心理カウンセリングが盛んな米国の実状を反映している。

こうした論考に接し、かつては米国の実情がどうであれ「文学」がそれで成立するのかという疑問が生じたものであった。シェイクスピア作品を「臨床心理学症例集」に変えてしまう試みが、果たして「文学研究」なのかという疑問はつきまとうと思った。この疑問のひとつの回答として、シェイクスピア作品に描かれた「民衆の革命的なエネルギー」を、臨床心理学を手段として浮き彫りにしているのが米国シェイクスピア研究博士論文だという考え方ができるのではないかと考えた。

このことを説明できる記述として、サルトルが第二次世界大戦で疲弊した西欧からアメリカを訪れ、アメリカ人という存在への感慨として「もっとも画一的に見せながら、もっとも自由であると感じている」を紹介し、「非個性的画一主義、個々人が互換可能であることを疑わない」という意味での普遍性、そしてそれらを前提としたうえでの無限の個人主義的自由」が、サルトルの看取した「十九世紀アメリカニズムの土壌のうえに開花した二〇世紀アメリカニズムの特徴」だとする古矢句の記述<sup>17)</sup>がある。

「個々人が互換可能であることを疑わない」というのは「民衆」の特性ではなかろうか。西欧など旧世界では、労働者で熟練工でないものは、むしろ悲哀をこめて自分が隣の労働者と「互換可能であること」を歎く面がある。王侯貴族、インテリと、一般庶民を区別する線引きとして、「互換可能であること」の度合いが考えられる。「互換可能であること」は「互換可能ではない」王侯貴族、インテリなどに支配される、「被支配階級」であることの証ともいえる。「労働者よ団結せよ」の掛け声によって一般労働者という「互換可能である存在」が力を得たとしても、「互換可能であること」に変わりはない。誰かに指導されるのではなく、個々人が「互換可能であること」を維持したまま自由であって、しかも拘束状態にあるのではなく、エネルギーを持って活躍しているという意識がアメリカ人には、少なくとも第二次世界大戦直後にはあったとサルトルを援用して指摘するのが古矢の「楽天的世界観」が精神分析学など人文諸科学の背後にあるとする見解の底にある。

「楽天的世界観」にせよ、「互換可能の個々人の無限の個人主義的自由」にせよ、それが可能なのは、表向きはフランス革命理念の「自由、平等、博愛」に擬した「自由、平等、機会」への開放性が「アメリカ的普遍主義」「アメリカの夢」と呼ばれて、固定的な信仰個条としてではなく、背後に「解放の神学」がある目標価値として作用するという、古矢が「マルティカル

---

16 Datta, Pradip Kumar, *The role of the good counselor in selected Shakespearean Tragedies*, (1991). 930.28||Sh||Dat

17 古矢句,『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』, (2002), p.44.

チュラリズムへの歴史的眺望」として、非自発的集団の文化的特性を一種の拘束衣としてとらえて、そこからの解放を目指すのが多文化主義だと説明したこと<sup>18</sup>が表すような、アメリカの「民衆の革命的なエネルギー」ではなかろうか。

要するに、アメリカは「民衆の革命的なエネルギー」に支えられ、これを正当化する理念を持つ国家なのだ。ただしその理念については、建国当初から確立していたわけではなく、十九世紀になってもまだ未成熟で、その「永久革命」的性格を、十九世紀当時のアメリカ人たちが十分に意識していたとはいいたくない<sup>19</sup>と古矢が十九世紀アメリカニズムについて指摘したように、後から成熟したという面は否めない。上記からは第二次世界大戦直後に華々しく登場した考え方だとも見て取れる。

その考え方の最新のヴァリエーションともいうべき多文化主義が声高に主張される昨今の場合を眺めてみよう。

「2001. 9. 11テロ」直後、「民衆の革命的なエネルギー」はフセインというある種の「アラブの英雄」を叩く行動に出るブッシュ大統領を後押しした。そして、それが行詰ったとき、例えば次のような絵に描いたような臨床心理学的な考察は少なくなってゆく。

1995年には、幼児が母親からミルクを与えられるときに、願望の実現と思ったり、実現せずにベビーベッドを蹴飛ばす代償行為に及んだりすることを幼時体験として論を展開するフロイトの分析をもとにして、思考が現実化すると信じる魔力的思考を分析し、『マクベス』などに適用する論考<sup>20</sup>が書かれていた。

ただし、そこで浮き彫りになるのは現実を変えたいと願う「民衆の革命的なエネルギー」であり、それを個人の視点で表現すれば「アメリカの夢」実現願望である。「思考は現実化する」というのはナポレオン・ヒルの『成功哲学』の主張の目玉(それが何であれ、人間が想像し信じてことができるものは、必ず実現させることができる)<sup>21</sup>でもある。それは「透明性のあるルール」にのっとった競争の結果であるべきで、アメリカ政府が認定した成功の結果に反抗するものであってはならないともいえる。だからイラクのフセインの野望は打ち碎かれることになる。アメリカが9. 11テロによって豹変したわけではなく、それ以前の考え方に従ってイラクを叩いたといえる。

つまり臨床心理学的な考察は「座右の銘の供給源としての古典」観とも、イラク戦争の「隠れた大義」とも関連する。

---

18 Ibid.pp.167-8.

19 Ibid.p.16.

20 Favila, M. C., *Magical thinking in Shakespeare's tragedies*, (1995). MF||189||52

21 ナポレオン・ヒル(田中忍訳),『成功哲学』(産業能率大学出版部,1977),p.30.

ユング派の臨床心理学でなくとも、アイコン、エンブレムなど、イメージャリーに関わる考察、宗教について考察し、聖俗の感覚のあるものは、すべて、極めて広義な意味で「心理学」と関わる。そのこととシェイクスピア作品に内包する「民衆の革命的なエネルギー」との呼応関係は、「心理学」の持つ革命性を説明すれば明らかになる。

このことの説明になると思われるのは「精神的権威と世俗的権威の分離」を古矢が「西欧文明の精髓」として挙げている点である。そこからのみ生まれるのが個人の内面の自由、法の支配、社会的多元性とその反映としての政治的代議制だという<sup>22</sup>。

そうして内面の自由が確保されたアメリカ社会で、心の病は専ら心理カウンセラーにゆだねられていた一時期があった。シェイクスピアの劇作品にカウンセラーに当たる人物を探す発想も、例えば『ロミオとジュリエット』の神父をカウンセラーとするかどうかを考えれば、その思想的背景が分かる。信仰を重んじて「精神的権威と世俗的権威の分離」を十分しなければ、神父は本来の神父として「霊の指導者」になる。けれど『ロミオとジュリエット』の神父は一方で仮死状態をもたらす薬を調合するなど、近代科学のさきがけのような行為をする。その忠告も徹底したキリスト教倫理ではない。

聖俗の分離と科学技術の台頭が、アメリカにおけるシェイクスピアの読みにも、読まれるシェイクスピアの文学の背景そのものにも深く関わっている。

そこにベーコンが関る。ベーコンの心についての考察は「心を含む身体機能心理学」(faculty psychology) の歴史に残るもの<sup>23</sup> (分類項目「(3) 競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする (フェミニズムが典型) 圧力のある特徴(a) フェミニズムに関するもの」で詳しく言及) で、ベーコンと「心理学」とは関りがある。

そのベーコンは、二つの意味で革命的であった。

ベーコン自身、父が大法官である家に生まれ、アリストテレス哲学などを教育され、それに対する反発があったといわれる。そこから独自の自然哲学を切り開いていった。

そうした学問の中の革命と、さらにロンドン市民など民衆と手を結ぶ革命的傾向がある。

シェイクスピアの作品にも「革命的傾向」がある。ハムレットのような、権力の締め付けに対し、武器を取って戦うか否かで逡巡し、個人を解放したい欲求と、権力が押し付ける拘束との間で板挟みになって狂気に至ることを、舞台芸術として「美」とともに表現する行き方である。ハムレットは狂気を装い、近代人として悩み逡巡する。恋人のオフィーリアを「尼寺へ行け」と傷つけ、オフィーリアは水死し、その花に囲まれ水面によこたわる姿がエバレット・ミレーの絵画になって後世の人々の記憶に残る。つまりオフィーリアは「美と狂気」の象徴となる。

---

22 古矢旬, 『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』, (2002), p.316.

23 Wallace, Karl R., *Francis Bacon on the Nature of Man—The Faculties of Man's Soul*, (1967).



「美と狂気」は、聖俗の分離、「革命的傾向」、「心理学」の相互関連を考える鍵になるのではなからうか。そのことはシェイクスピア時代の演劇、マスク、マスクについてのベーコンの好みといったことをヒントに考察できる。

まずは聖俗の分離が代議制を生むという古矢の考察と結びつけるために国家支配の二つの方法について考えたい。

「(2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴(b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの」の項目で、「ヨーロッパ精神」との関係を含めて議論を整理すれば、国家支配のやり方で「古くからの記録による神秘性に基づく支配」と「英雄による支配」が考えられると先述した。

先述をさらに繰り返せば、科学技術による物理的な支配はこの二つを合成したものと考えられる。聖書学、古典学を必須としたエリートによる支配の中で、「古くからの記録」の整理の仕方が合理的になり、精緻なシステムを築き上げ「科学」が誕生する。一方で、職人の知恵という「大衆の中の小さな英雄」の働きが積み重なって「技術」となる。この二つを結びつけ「科学技術」としたのがベーコンの「知は力なり」であった。

それと平行して、ベーコンの「知」を間近に見ながら、人間の心の問題を重視し、「心理学」という疑似科学を創造したのがシェイクスピアであったという言い方ができるかもしれない。少なくとも後に「心理学」の原材料となる作品を生んだ。純粋自然科学の立場から「心理学」は疑似科学であるかもしれない。けれど、人文科学として戦後アメリカで花開くことになった。さらにアメリカではかかりつけの心理療法士を持つことがステイタス・シンボルになるまでになった。

この「心理学」はベーコンと演劇の関係に垣間見え、そこに「古くからの記録による神秘性に基づく支配」と「英雄による支配」という二つの統治の方法が関るのではなからうか。

マスクを演劇に影響を与えた芸能としてみるのではなく、マスクで伝えられるストーリーの粗筋とシェイクスピアの演劇の粗筋の関係を考察し、マスクをシェイクスピアの作品のストーリーのアーキタイプとして見るような考察で、いわば、マスク心理分析のような論考がある<sup>24</sup>。このような「マスク」ならベーコンも歓迎したかもしれない。ただし、当時のマスクがそのようなものであったかどうかは疑問が残る。同時に米国学位論文の論調はベーコンの子孫という感覚を強くする。

これを上記の概念で分析すれば、マスクは本来「古くからの記録による神秘性に基づく支配」の一環と見てもよいのではなからうか。マスクの芸術性を重んじる立場からは、あまりに政治的な見方に思えるかもしれない。けれどマスクは大衆芸術というよりは宮廷芸術であり、日本

---

24 Levin, Kate, D., *Dramatic Reactions to the Masque, 1590-1660*, (1997). MF||198||5



の能が足利幕府から江戸幕府まで將軍家の手厚い保護を受けたこともヒントにして、一般に伝統的な仮面劇の特性として、そこに、古くからの伝統を感じさせる謎めいた迫力で人々を畏怖させるといふ、権力が利用する側面を見ないわけにはゆかない。

ユング派の臨床心理学でなくとも、アイコン、エンブレムなど、イメージャリーに関わる考察、宗教について考察し、聖俗の感覚のあるものは、すべて、極めて広義な意味で「心理学」と関わると先述したことは、マスクや能にも当てはまる。宗教的な儀礼、政治権力の統治の手段としての儀礼、西欧のキリスト教に捧げられる聖画、アイコン、日本の神社仏閣に奉納される絵馬、エバレット・ミレーのオフィーリアの絵に至るまで、人類は多くの「意味を付与される」図像の群れとつきあってきた。これらを宗教と関わらせるか、政治的儀礼と関わらせるか、演劇、芸術絵画などの芸術と関わらせるか、心理分析の材料とするかは時代の変遷と、これらをとらえる視点による。

ベーコンのマスクについてのエッセイを読めば、演劇についてのベーコンの見識が分かる。現代でいえば主題を追求するストレートドラマを評価の中心に置きながら、王侯貴族の慰みとしてのマスクや、演劇につけ加えられた踊り、歌など、現代のウェスト・エンドの演劇状況になぞらえられるものが当時すでにあったことが分かる。「演劇人」ベーコンを考えてもよいくらいベーコンは演劇に対する見識を持っていた。

「ベーコンはマスクが嫌い」という言葉が独り歩きする傾向がある。ベーコンのエッセイは決してマスクを毛嫌いするのではなく、主題の追及と無関係な装飾的で単なる貴族趣味をベーコンが嫌ったことを示すだけだ。

ただし、ここに宗教や政治との絡みではない純粋な演劇を好むベーコンの姿勢が現われているとすれば、古矢がいう「聖俗の分離からのみ生まれるのが個人の内面の自由、法の支配、社会的多元性とその反映としての政治的代議制だ」という指摘と深く関わることになる。

政治的な社会現象としての聖俗の分離は、シェイクスピア時代のイギリスの場合ローマ・カトリックの支配をイギリスの王権が脱して、これと戦ったことに現われている。ベーコンは「代議制」の旗手として予算をめぐるエリザベス女王と対立し、晩年、大法官であった経験をもとに個人の内面の自由、法の支配に関するエッセイを書いた。

これと同時並行してアイコン、エンブレムなど、イメージャリーに関わる「意味を付与される」図像の群れが、宗教や政治から離れ、演劇として鑑賞できる文化的環境を整えたのがシェイクスピアであったのではないか。

その間解剖学が進展し、ハーヴェイの血液循環説が出るまでの科学技術的な考察はシェイクスピアの周辺で行われていた。当時「心理学」というものは存在しなかった。けれど、後から「心を含む身体機能心理学」とベーコンの自然哲学が評されるような、「心理学的なるもの」はすでに台頭していた。また疑似科学ということ言えば、当時の自然哲学は現代から見れば「心

理学的なるもの」と未分化な面があって、その意味で疑似科学といえるかも知れない。

ところで「美と狂気」のイメージャリーと並んで「異形」のイメージャリーもシェイクスピア劇には頻出する。主として前期の喜劇、後期のロマンス劇についていえば、「醜い金貸し」「嫉妬に狂う王」といった「異形」が追い払われ、「美と狂気」の「狂気」も追い払われ、「正気のみが残ることは、民衆の革命的なエネルギーが鎮圧され、ヒロインの憂鬱が治癒されて秩序が回復することになる。歴史劇、悲劇でも「醜い野心家」が追い払われヒーローか、ヒーローの跡継ぎとしての若者が、唯一残った「正気のみ」となるか、「正気のみ」を体現する人物が死ぬことで永遠性を獲得するかといった結末になることが多い。そうした象徴的なイメージャリーが国家統治の手段になり、それは「古くからの記録による神秘性に基づく支配」と「英雄による支配」の巧みな組み合わせになる。

巧みな組み合わせというより、そもそもどのような国でも建国当初は「英雄による支配」しかない。それが次第に「英雄伝説の確立」となって「古くからの記録による神秘性に基づく支配」が確立してゆく。

『ヘンリー六世』三部作中のグロスター公爵は、無残に父を殺されたがゆえに人間性と距離をおく、ルネッサンスとして新しいタイプの悪党だとする論考<sup>25</sup>も、シェイクスピアを臨床心理分析で映画的に蘇らせた趣がある。一応映画を大衆藝術とみなせば、「民衆のエネルギーが起こす革命的傾向」になる。こうした歴史劇の血みどろの争いの果ての人間像などは、「美というより異形」を描く民衆的なエネルギーがシェイクスピア劇に存在することを指摘する米国学位論文といえる。『マクベス』の魔女と、魔女が繰り広げる儀式は「異形」の放逐と「正気のみ」の確立を赤ん坊のイメージで暗示し、ジェームズ一世治世に対するフラタリーであると同時に、作品全体はマクベスの放逐と若者の政権樹立でそのことを表す。

それは能の「小面と狂気」に対する「般若、ひょっとこ、翁面など異形の面」を連想させる。能など日本の古典文化の「異形」の背景には民衆のエネルギーが隠されていて、梅原猛がそれについて論ずるというより、自らがそのエネルギーを体現するようにして様々な研究を行い、スーパー歌舞伎で創作活動を行った。民衆のエネルギーと、民衆のエネルギーに立脚した英雄、英雄の権力欲が怨霊の形で現れることも含めた民衆のエネルギーである。それはシェイクスピアについてもいえるのではなかろうか。

英国中流階級は、「民衆の革命的傾向」を「いずれ折伏される他者」として受容し、伝統的な嗜好として「美と狂気」を尊重する。映画でも「美少年と狂気」を描いたすぐれた作品は多い。「異形と革命的動乱」を描き、民衆に十分立脚した英雄が最終的に勝利することも描くにしても、

---

25 Evans, Christopher W., *Determined to Prove a Villain: A Reexamination of Shakespeare's Duke of Gloucester*, (1995). MF||189||14

民衆のエネルギーそのものを、迫力をもって描くことは、もう一つ得意としない。アメリカはその逆である。その代わりオフィーリアの「美と狂気」を、「アメリカ娘」の存在を意識した米国学位論文はもうひとつ理解せず、別の解釈を提示する。（「選択の主体性」を無条件で認められる「アメリカ娘」については分類項目「(3) (a) フェミニズムに関するもの」参照。）

アメリカではおよそ英雄伝説とはかけ離れて感じられるものまで英雄伝説に仕立てる。例えば、『ロミオとジュリエット』を、恋愛悲劇ではなく、ジュリエットをヒロインとし、遍歴の果てに英雄の死に辿り着くロマンスと捉えるもの<sup>26</sup>がある。ジュリエットは、いわば遍歴の女性騎士になってしまう。若い男女の恋愛がパートナーを他者ではなく神と崇め、永遠の愛を誓い、その純粋さが巻き起こす悲劇を、大人が困惑しながら最後にあたたかく見守る、旧世界の恋愛観を否定する論考ともいえる。そうした立場に立てば、ただ受身で花に囲まれ自殺の疑いをかけられて死ぬだけのオフィーリアをヒロインとは認められないことになる。

「精神的権威と世俗的権威の分離」を古矢が「西欧文明の精髓」として挙げ、そこからのみ生まれるのが個人の内面の自由だと指摘したことは「自由恋愛」の概念とも深く関る。『ロミオとジュリエット』が感動を呼ぶのは「内面の自由」があつてこそその「自由恋愛」に若い男女が殉じたことではないか。ジュリエットを遍歴の女性騎士に仕立てなければ気がすまないアメリカの読みは、アメリカがまだ建国途上にあるという意味で聖俗の分離が十分でなく、「内面の自由」が十分確保されていない国ではないかとの疑念を持たせる。

1791年の憲法第一修正条項に信教の自由を掲げるアメリカ合衆国に対してこのような発言することは不穏当かも知れない。

「(2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴(c)西欧文化全体と関わるもの」で、西欧がいわゆる聖俗革命を経ているのに対して、アメリカは経ていないと指摘したことも、おそらく政治学、法学の立場からは経ていないどころかアメリカ独立戦争がまさに聖俗革命であって、その結果として独立宣言、憲法第一修正条項で信教の自由が確立したと反論するであろう。また、英国はピューリタン革命を乗り越えて王政復古を果たしたとしたことについても、それだけでは不十分で、その後ジェームズ二世のカトリック回帰に抵抗し（その抵抗にはニュートンもケンブリッジ大学選出の国会議員として関わる）、それに続く名誉革命の後、公務員が英国教徒に限られるコモン・ローによって始めて政教分離が確立されたというかもしれない。

この点について一つの論点整理のための仮説を提示したい。それは英米の政教分離原則について、英国については法学、政治学の立場の見解が妥当であるけれど、アメリカについては憲法などがあまりに理念先行であり過ぎて、一方先住民を駆逐しながら西部開拓によって建国さ

---

26 White, Karyn Alease, *The romance of "Romeo and Juliet"*, (2003). CR||291||1

れた経緯から、憲法理念とは別に、建国途上の西欧古代国家、つまり古代ローマのような英雄中心の国家の影がつきまとうということである。

この点を科学史の側面から考察すると、ニュートンの科学を含む「外面的な活動」に焦点を当てれば、確かにジェームズ二世のように勝手にカトリック教徒のスタッフを選任して大学に送り込むという明らかな宗教がらみの権力の横暴に抵抗し、名誉革命を経て、その結果公務員からのカトリック教徒排除が確定した時点が政教分離の成立としてもいいように思える。

けれど、ニュートンが「隠れアリウス派」の傾向があったことはひた隠し、ニュートンが占めたルーカス教授職をその弟子ウィリアム・ホイストンが継承し、三位一体否定を公言したために教授職を追われたことを考えれば、政教の分離が必ずしも「内面の自由」につながらず、イギリス政府が議会も含め三位一体を大学教授に強制して解任するという公権力の行使があったとすれば、イギリスでは「内面の自由」はその時点でもまだなかったように見える。

もちろん英国政府の論理は一貫していて、公務員は英国教徒に限られ、人文科学的な教義を奉じてローマ・カトリックに対抗し、その圧力から英国国民の「内面の自由」を保護してきたのだから、ホイストンのような特定の宗教を信じる人物を公的な権威を持つ職から排除するのは当然だということになる。それなら英国は、英国教会の教義に限って、それに反することを公的な立場にある者は公言しないという、アメリカ合衆国憲法第一修正個条には反するコモン・ローでもって「内面の自由」を確保してきたことになる。まるでワクチンという害毒を少量注入して健康体を保つやり方のように、英国教会の教義という「宗教のワクチン」を国家に注入することで特定の宗教が国家権力を奪取することの害から国家を護り、国民の「内面の自由」を確保しているかのようだ。

このワクチンの効き目が現れたのが名誉革命以降の公務員からのカトリック教徒排除のコモン・ロー成立であって、ワクチンの注入はもっと以前からではなかろうか。

科学技術研究の自由ということであれば、ニュートンが会長をつとめた王立協会はすでにチャールズ二世の治世で実現していた。ニュートンの前任者であるロバート・フックもすでに様々な業績をあげていた。国家がすでに科学技術研究を正式に認知し、支援していたとすれば、科学技術は根本において宗教とは異なる見解を科学者が仮説として提示する「内面」の自由なしに発達しえないことを考えれば政教分離も「内面の自由」も、名誉革命を待たず、ある程度確保されていたことになる。

その論法で行けば宗教に関して現代の西欧の科学研究者で定着している無神論を経て深い信仰に至る「内面の自由」の考え方はベーコンにまで遡り、ベーコンは大法官であって、その著書が発禁になったこともないことを考えれば、エリザベス朝政府ですでにある程度の政教分離、「内面の自由」は確保されていたといえる。もちろん宗教がからむ苛烈な罰則とその執行を考えれば、法学、政治学的にはとても肯定できない考え方であろうけれど科学とその前身である

自然哲学の考え方からはそういう要素を否定出来ない。

さらにシェイクスピア＝ペーコン説を首肯出来ないにせよ、ペーコンを含むインテリ・グループのシェイクスピア作品への影響まで否定する人は少ない。そうしたインテリ・グループに哲学的な「内面の自由」の考え方があり、シェイクスピア作品がその表現だと考えれば、すでに当時「表現の自由」に近いことまで確保されていたことになる。当時の検閲の実態から法制度的にこの見解を否定する論理は十分考えられる。けれどシェイクスピア作品が現に存在するとき、そこに「表現の自由」の確かな感触がないとはいえない。宗教的な要素を含む体制批判、露骨な性表現など、現代で十分「表現の自由」が確立されたはずの先進諸国でさえ、公共の福祉とのかねあいで「シェイクスピアを検閲する」必要さえある場合がある。つまり現代国家が禁止したくなる表現さえ許される自由が、当時既にあったともいえる。

ここで先述の論点整理のための仮説を拡充したい。アメリカが世界で最も進んだ政教分離原則を掲げる憲法を持ちながら、そうした理念とは別に英雄中心の古代国家の影を帯びるとすれば、英国は名誉革命で公務員から事実上カトリック教徒を排除する形の「政教分離」を果たした段階で何か革命理念を持った新しい国に生まれ変わった訳ではなく、大英帝国建設の過程でもともとあった政教分離、「内面の自由」確保の国柄を拡大発展させただけではないかということである。

アメリカが英雄中心の古代国家の影を帯び、古代ローマの英雄イメージを抱え続けるとすれば、大英帝国は、アメリカが独立する以前はアメリカ大陸の征服も視野に入っていたし、すでに西欧大陸諸国の列強を押しつけて国力を高める壮大な野望を抱くには古代ローマの英雄イメージを抱かざるを得なかった。けれどアメリカ独立以後はその影を薄める。そして十八世紀以降確立した英国紳士像には中世の騎士と正直な市民の影がつきまとう。

こうした英米の違いを眺めるとき、そこにオックスフォード、ケンブリッジ両大学が発信する知性に対する反・知性の動きが介在する。イギリスはとにかく一度カトリックに傾斜したチャールズ一世の首を切り落とし、その後クロムウェルの清教徒革命を一時期成功させてその支配下にあった。それから、その支配を否定してチャールズ二世の王政復古を認め、ジェームズ二世のカトリック傾斜に対しては名誉革命で応じた。つまり、カトリックの方向からも、ピューリタンの方向からも、イギリスは現実には宗教がらみの権力行使を一度は許し、それから主権者の処刑を含む劇的な革命を行ってこれを排除した歴史がある。

これに対し、アメリカはピルグリム・ファーザーズの建国神話を抱いたまま、現実には宗教が絡む権力の横暴を経験したこともなければ、これを革命によって覆したこともない。建国時点で確かに政教分離原則の憲法を持っはいる。しかし、常に古代の神権政治の復活でも望むのかと思われるような反・知性的な宗教運動が政治的に力を持つ国でありつづけた。

これらを「宗教に権力を奪取される国家の病気」と「その予防ワクチン」という先述の比喩

で言えば、英国は何度もこの病気にかかって苦しみ、何とか「英国教会というワクチン」でしのいでいるのに対し、米国は憲法第一修正個条という病原菌根絶の薬を服用した。その結果もはやこの病気にかからないことになったはずなのに、かえって理念先行の憲法は反・知性主義という副作用に見舞われ、事実上絶えず病気になりかかる症状を呈しているということになる。

さて、ここで『ロミオとジュリエット』を恋愛悲劇ではなく、ジュリエットをヒロインとし、遍歴の果てに英雄の死に辿り着くロマンスと捉える論考に話を戻そう。

それは梅原猛のスーパー歌舞伎が描く恋愛を連想させる。スーパー歌舞伎の恋愛もまた「英雄伝説」の一環としてのヒーローとヒロインの恋愛であって、聖俗の分離が十分でなく「内面の自由」が確保されていない建国時の段階ではないかとの疑念を禁じえない。恋に身を焦がし、愛する相手のために身をひく歌舞伎の登場人物を梅原はマゾヒズムと批判する。「純粋と称される犠牲的な愛には、どこかマゾヒズムの一面があるのではないかと思う<sup>27)</sup>」という。その批判にも「内面の自由」に殉ずる覚悟への無理解を感じないではいられない面がある。同時にマゾヒズムという言葉と「純粋と称される犠牲的な愛」とを結びつけることは、「自由恋愛」と「内面の自由」に関する考察を深めてくれる。

『ロミオとジュリエット』の愛もまた「純粋と称される犠牲的な愛」なので「どこかマゾヒズムの一面がある」のだろうか。この問いに答える前に、「聖俗の分離」がなぜ「内面の自由」をもたらすのであろうか考えてみよう。

神権政治下では外面も内面も人々は権力者の支配下にある。「反体制的な意見を持つ自由」が許されない。

「聖俗の分離」によって、一応「内面」は聖職者に、「外面」は政治経済を司るものの支配下にまず入る。聖職者が真摯に宗教を極める権威であった場合でも、その行動は外面的には俗権によって規制される。その意味で聖職者の権威は限定的なものになり、宗教的な立場から理想を説いても、それが現実には俗権の支持なしには実現しないという意味で「内面の自由」しか与えられていないことになる。政治権力を批判する自由は「内面の自由」としてのみ保障されている。

政治経済の力の前に聖職者のお説教が形骸化し、聖職者自身が政治や金の力に屈することになれば、本気で聖職者に「内面」の管理を委ねる人は少なくなる。政治経済の原理は、一見長いものに巻かれ、利益追求だけを身上とすることのように見える。しかし人間はそれだけでは生きられない。権力者に追随すれば得と分かっている、損を覚悟で権力者に逆らい、金が儲かれば良いと分かっている、わざわざ金銭的に損をする生き方をするものが現れる。なぜかといえば、そのことによって「内面の自由」が確保されるからではないか。

---

27 梅原猛、『地獄の思想』(1967), p.188.



「聖俗の分離」が始まる近世以降、「内面の自由」を確保しようとするれば、こうした複雑な手続きが必要になる。我が国の場合、すでに『万葉集』『源氏物語』に「内面の自由」と、それに基づく「自由恋愛」に呼応するものがあることは驚異的である。もちろん、これらが西欧的な「内面の自由」「自由恋愛」と同じものかどうかは検討の余地がある。

一方、建国時の英雄に付き従うことは「聖俗の分離」もなく、神権政治の支配下にある不自由な生き方のように見えて、結構「内面の自由」は確保されている。英雄は、いずれ国家を征服するにせよ、いま一步のところで失敗して死ぬにせよ、英雄に付き従うことは政治的に決して得と決まった行為でもなく、むしろ損を覚悟でついていくという感覚を保持できる。その精神性に感応することは、強制されたものではなく、自ら選ぶという意味において「内面の自由」は確保されている。

スーパー歌舞伎にせよ、米国学位論文の論調にせよ、民衆の革命的なエネルギーに立脚した英雄を讃える環境では、そのような形の「内面の自由」の確保が行われ、それは旧世界のものとは異なる。

このことを映す鏡のように、政治的な建国に対応して、布教段階の宗教にもまた「内面の自由」が確保される。宗教がまだ人々に認知されず迫害を受ける場合、初期のキリスト教者もしくはキリストその人も、強烈な形で「内面の自由」を確保している。梅原が「純粹と称される犠牲的な愛には、どこかマゾヒズムの一面がある」と指摘したのは近松作品の恋愛についてであった。それはそのままキリスト教の殉教の歴史についてもいえる。キリストその人は鞭で打たれ十字架に釘付けにされて果てた。それを奉じるキリスト者は、生命そのものを原罪とし、その魂を救済されるために幼少より鞭打たれ、神の鞭を喜びとして生きる信条を持つことになる。

梅原の「マゾヒズム」という精神分析用語を敷衍すれば、あるいは近松の心中ものとキリスト教との関係を述べられるかも知れない。キリスト教が伝来し、キリスト教迫害が行われ、残酷な殉教場面が人々の目にさらされ、やがてキリスト教が我が国に伝来する以前にはなかった「責め絵」が江戸時代に現れ、時代を同じくして近松の徹底した自己犠牲を伴う「恋愛悲劇」が現れた。

ここで『ロミオとジュリエット』に話を戻せば、ジュリエットは「純な恋愛」という宗教に殉じたかのような行動をする。実際シェイクスピア批評ではこうしたキリスト教のヴァリエーションとして「愛の宗教」が当時のイギリスにあったという議論も行われた。そうでも考えない限りキリスト教倫理とはそぐわない若者の恋愛への賛歌のような作品が現れたことを理解しにくいからである。

何不自由なく育ち、ある程度教養もある女性が、突然両親や家族を捨ててまでも恋に身をゆだねることは「愛の宗教」なる概念を導入しなくとも理解出来るのではないか。それは「内面の自由」を求める欲求から来ている。



それは同じく何不自由なく育ち、ある程度教養もある名家の若い女性がシスターになることを決意し、僻地の貧民救済に向かうことと精神的には似通う。「聖俗の分離」論から行けば、明らかに俗権の下で何不自由なく育った若い女性が聖権の下に身を投じ、わざわざ苦難を求めるのだ。それは「内面の自由」を求めることであり、俗権の下で過ごす社会の閉塞感を感じてのことではなかろうか。

ぬくぬくと過ごす中で「社会の閉塞感」を感じることも、こうした行為についての大きな要素だと思われる。そして、それは「社会の閉塞感」を打破する訳ではなく、「社会の閉塞感」を敢えて甘受し、決して体制批判をすることなく、批判を自分に向け、徹底的な自己犠牲をすることで「内面の自由」を確保しようとするのだ。

何かカルト的なものにマインド・コントロールされることでもなく、教養ある自己をしっかり保ったまま、そのような行為をすることは、確かに「マゾヒズム」といわれる要素がないとはいえない。ただ、それは自虐のための自虐ではない。あくまで「内面の自由」を確保したい欲求に基づく。そうした行為をするヒロインはジュリエットだけでなくデズデモナーナもオフィーリアも、シェイクスピア作品には多く登場する。

近松の心中ものの登場人物にも、『源氏物語』の登場人物にも、ぬくぬくと過ごす中で「社会の閉塞感」を感じるから恋に身を焦がすという要素がある。『万葉集』にも、そうした要素が皆無ではない。教養ある自己をしっかり保ったまま「社会の閉塞感」を感じる女性が、「内面の自由」を渴望することの表現は『紫式部日記』に垣間見える。自ら恋に身をゆだねる欲求を作品化したのが『源氏物語』ではないか。それを「恋懺悔」と捉え、キリスト教的な原罪の告白とみなすのは、少し奇矯に過ぎるかもしれない。けれど梅原が当時の高僧にして第一のインテリであった源信との関係を主張し、『源氏物語』について「地獄の思想」を語ることの、一つの理解方法になるのではなかろうか。

こうした考察をした後に、改めて『ロミオとジュリエット』を恋愛悲劇ではなく、ジュリエットをヒロインとし、遍歴の果てに英雄の死に辿り着くロマンスと捉える論考を考えてみよう。ジュリエットはまだ年若く「社会の閉塞感」を感じる年齢ではないように一見思える。けれどパリス伯爵との縁談を断り、ロミオにどこまでも付いてゆく決断は、十分に自分を取り巻く「社会」とその「閉塞感」を感じてのことではないか。似たことが宗教の場合ジャンヌ・ダルクについていえる。無学な農民の若い女性に「社会の閉塞感」もないだろうという意見に対しては、素朴な信仰が失われる「社会の閉塞感」批判なしにはあの行動は出来ないと考える。

さて、その上でジュリエットは遍歴の騎士か、ということを考える。こうした論考は、「社会の閉塞感」を感じるから恋に身を焦がし、「社会の閉塞感」を敢えて甘受し、決して体制批判をすることなく、批判を自分に向け、「マゾヒズム」に似た感覚も否定出来ない状態で恋人に身を投じるヒロインを、どうも理解していない面があると思われる。梅原と同じ「内面の自

由」への無理解ではなかろうか。そして、恐らくこの論考の作者も、梅原も、敢えてする「無理解」かも知れない。

アメリカでは「社会の閉塞感」を敢えて甘受する「マゾヒズム」に似た感情が褒め称えられることはない。梅原もそうしたものに理解を示すタイプではない。アメリカも梅原の思想世界も、「社会の閉塞感」とは無縁の建国時の心情か、「社会の閉塞感」があるなら積極的にそれを打破したい精神に生きるのではなかろうか。ジャンヌ・ダルクには「社会の閉塞感打破」を考えてもよい面がある。ジュリエットをその意味での「騎士」にするのは、無理ではなかろうか。

それは「美と狂気」という、どちらかといえば「社会の閉塞感」を敢えて甘受した上のものと、「異形と革命的動乱」という「社会の閉塞感」を甘受せず、その打破に向かうものとの対立を示唆する。

以上の考察を「2001. 9. 11テロ」以降、世界は現実のものとして提示してくれた。すなわちアメリカはイラクに侵攻し、「異形と革命的動乱」の世界にイラクを変えてしまった。そして、アラブの英雄になる幻想を語り、アメリカの要人を暗殺したり連続殺人を行う「狂気」を実行していた人々の心理分析の世界（F B I 心理捜査官の手記に掲載され映画化もされた）が、実際にアルカイダによって「狂気」とも「現実の闘争」ともいえない形で眼前に繰り広げられることになってしまった。

ところで「社会の閉塞感」の中で「内面の自由」を追求する旧世界の身を焦がす恋を、梅原は「マゾヒズム」という精神分析用語で評した。英文学批評における「愛の宗教」に類似して、近松など、文楽、歌舞伎が持つ「愛の宗教」の日本版である「聖なる心中」の価値観を、一挙に通俗なものに変化させる効果を、それは持つ。

『データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一<sup>28</sup>に先述したように、「心理学」が革命的なのは「ヘブライ・ヘレニズム文化」を基調として評価基準を設定する旧世界的「文学研究」に対し、評価基準を崩壊させ、あらゆる宗教的・道徳的考察を相対化する作用があるからである。まさに最も能率のよい「聖俗分離マシン」ともいえる。その例を米国シェイクスピア研究博士論文で挙げてみよう。

最終章で12世紀フランスのキリストが踊るイコンとエンブレムを掲げ、ユーモア、楽しさに神意が現れることを提示し、禅など、キリスト教以外にも例があることをいう論文<sup>29</sup>がある。聖なる道化の概念をシェイクスピアに導入し、道徳劇からの発展を道化論に適用する。フェステテからリア王付きの道化への発展で、狂気を制御する道化を指摘し、ハムレット、ハル王子などの道化性も、聖俗のバランスをとる者との立場で解析する。「祝祭喜劇」論と道徳劇、エン

28 富山大学人文学部紀要第40号（2004）。

29 Pyle, Sandra Jean, *Holy Madness: The Ministry of Shakespeare's Fools*, (1996).MF||194||12

ブルーム論の結合した論考といえる。

このようにアメリカにおける「心理学」は既存の倫理を破壊するにせよ、唯一「チャリティーの倫理」に焦点を当て、そこに倫理性を集中する働きがある。「心理学」という「聖俗分離マシン」が「聖なるもの」を粉碎して「俗化」させるか、民主主義国家という「俗権」に従属するものに变化させるかした末に、最後に残った「聖なるもの」かも知れない。つまり「聖俗の分離」は「内面の自由」を確保し、政治的な代議制を生むと同時に、忘れてはならないのは市場経済を生んだことである。市場原理は、まず金儲けを是とした上で、社会還元としてのチャリティーを推奨する。それは貧乏と金持ちについての考察の果てに「内面の自由」を確保する働きともいえる。

貧乏人が犯罪や疫病の巣として嫌われたり、同時に労働力源として尊重されたりする社会情勢の変化に対応して、文学でも貧乏を悪とするものや徳とするものが現れる。1600年前後のイギリスについてこうした観点での考察を行ない、金持ちの境遇が変わって初めて知る貧乏を分析することを主題とする『リア王』のような作品が生まれる傾向は長続きせず、すぐステレオタイプの貧乏人を描く物語が登場するとするもの<sup>30</sup>がある。貧乏という観点で西欧文化とその倫理にこだわっている。広義の心理学的論考ともいえる。

この「貧乏に徳があるか」といった発想はベーコンが「逆境について」というエッセイで「金持ちの徳は穏やかさ、逆境の徳は堅忍不拔」と書いたことそのものである。これとシェイクスピアの「情熱の奴隷でないような人間がいたら連れて来い」（『ハムレット』三幕二場）を比較すれば、「人生がままならぬ庶民」シェイクスピアと「国家を担うエリート」ベーコンとの差を感じる。衣食足って礼節を知り、ある程度経済的に豊かになって穏やかさを知り、国家を論じられる。シェイクスピアのように没落商人の息子でロンドンに出てきた青年は、同時に「情熱の奴隷」にならざるを得ない心情を知っている。穏やかさを知り、国家を論じられるには、シェイクスピアのような演劇成金でもまだ駄目で、英国階級社会という「共同体の締め付け」そのものを何とか出来るベーコンのような立場が必要ではなかろうか。「何とか出来る」という意味は、科学技術と市場原理による貧富の差がある社会での倫理を考察することによって「内面の自由」を確保することではなかろうか。

こうした事情を考察するには、古矢旬が紹介した、サルトルが第二次世界大戦直後アメリカ人を見て感慨を抱いたことに立ち返る必要があるように思われる。「互換可能の個々人が無限の個人主義的自由」を謳歌する「楽天的世界観」をアメリカ人が戦後持ったという。それは科学技術が開く無限の未来の可能性ということではなかったか。その科学技術の哲学的な祖は

---

30 Pories, Kathleen Gail, *Fashioning the Face of Poverty in Early Modern England*, (1995). MF||189||44

ベーコンであった。

「自由、平等、機会」への開放性が「アメリカの普遍主義」「アメリカの夢」と呼ばれて、固定的な信仰個条としてではなく、背後に「解放の神学」がある目標価値として作用するという古矢の慎重な言い回しによる「マルティカルチュラリズムへの歴史的眺望」は、哲学的につきつめればベーコンの考え方に萌芽が見られることであり、ベーコンがエッセイで論じるように、「内面の自由」を確保して、市場経済と科学技術が開く未来を生き抜く指針とも考えられる。一方シェイクスピアはといえば、恋に身を焦がし、愛する相手のために身をひく歌舞伎の登場人物を梅原はマゾヒズムと批判するその批判に「内面の自由」に殉ずる覚悟への無理解を感じないではいられない面があると先述した、そのことを裏返せば、その説明になるのではなからうか。つまり「市場経済と科学技術が開く未来」といえば無限の可能性があるので、確かにシェイクスピアは無限の未来を約束する明るさが一方にはある。しかし、それは人類の欲望の解放であり、「情熱の奴隷でないような人間がいたら連れて来い」というハムレットの台詞が描く世界に突入することであった。その中で「内面の自由」を確保することがシェイクスピア劇のテーマではなかったか。

そして「共同体の締め付け」そのものを何とかした、つまり市場経済と科学技術が開く未来に突入した新世界アメリカの博士論文は、この意味でもベーコンの子孫だと思う。ただしシェイクスピアの子孫ではない。哲学的思索による「内面の自由」を理解しても、「情念の奴隷」という、むしろ「内面の不自由」のヴァリエーションを提示することで「内面の自由」を描くシェイクスピアの手法はアメリカでは理解されにくい。それは国全体が「内面の自由」を確保し続けるための永久革命という「情念の奴隷」になっているせいではないか。つまり、アメリカからはシェイクスピア作品からシェイクスピアの姿が見えず、ベーコンの姿しか見えないのでシェイクスピア＝ベーコン説が盛んなのだと思う。

以上の考察は「2001. 9. 11テロ」を勘案して以降、「座右の銘の供給源」としての古典観（歴史的地理的文脈無視の行動の人としての人生観）としてまとめようとしたものであった。「行動の人」はベーコンであり、聖書学、古典学が占星術、錬金術などを取り込み発達して「科学」となり、職人の知恵という「大衆の中の小さな英雄」の働きが積み重なって「技術」となり、この二つを結びつけ「科学技術」としたのがベーコンの「知は力なり」であったと先述した。ベーコンの子孫であるアメリカ（科学技術立国）のイラクへの対応（ハイテク兵器を主体とする攻撃）の背景説明になるように思われる。

こうした考察によって、科学技術立国、市場経済ということと「内面の自由」との関係では英米の違いが浮き彫りになったのではなからうか。イギリスでは「資本主義に反対するデモ」が行われ、昔ながらの騎馬警官が出て鎮圧にむかったことを、筆者は1998年から1999年にかけてロンドン大学へ文部省在外研究員として留学した際に目撃している。こうした「内面の自由」

がアメリカで許されるとは思えない。

ではアメリカは自由を制限する度合いがイギリスより強いのかといえば、むしろ反対ではないか。「内面の自由」「自由恋愛」で恋愛悲劇が観客の涙を誘うには、心の中だけで許されることで自由恋愛が滅多には実現しないという前提が必要になる。同じく「資本主義に反対するデモ」が行われる陰には、資本主義の廃止が現実には滅多に実現しないという前提がある。アメリカでは「資本主義に反対するデモ」という「内面の自由」はないかもしれない。けれど、広大な土地を買い、その中で計画経済だろうが何だろうが、資本主義とは別の体制を持つ別天地をつくることは自由である。現実には様々な宗教団体がおよそ現代のものとは思えない信念に基づき一夫多妻制度、ダーウィンの進化論の否定といった教育制度を実施し、それと言わないだけで、そうした土地における経済が資本主義市場経済に基づくものとは思えない。つまり資本主義市場経済とは別種の経済体制を持つ制度をつくったりもしている。

このことは「聖俗の分離」ということについての英米の違いが反映している。

十七世紀末、いわゆる啓蒙主義の時代に、それまでアメリカで支配的であった神権政治が崩れてゆくさまを、古矢は「大西洋の兩岸において、自然科学が発達し、人間理性に対する信頼がいちじるしく深まった」とし、「アイザック・ニュートンやジョン・ロックの影響は新大陸にもおよび、超自然的現象をただちに神の意志の現れとみなすような迷信を経験と実験にもとづいて批判する思想的傾向を生んだ」とし、その結果として「ニューイングランドの厳格な神権政治はしだいに宗教的な寛容論や政教分離原則にその座を奪われていった」<sup>31</sup>とする。

この記述を読めば、イギリス本国においてもアイザック・ニュートンやジョン・ロックの影響で教会の力が弱まるか、あるいは教義が厳格なものでなくなって政教分離が進んだかのような印象を与える。アメリカについては専門家なので古矢の記述を信用するとして、なるほど啓蒙思想によってアメリカでは政教分離が進んだのかも知れないものの、イギリス本国での聖権と俗権の分立はもう少し古くに確立されていて、その意味の「聖俗の分離」について、啓蒙思想の影響などはないのではなかろうか。

ニュートン主義を語る上で重要なボイル・レクチャーといわれるものは、ロンドンの富裕層への「科学」の解説であると同時に、キリスト教のお説教の一種であり、ニュートン自身聖職者になることを勧められたふしもある。「聖権」であるイギリス国教会の聖職者は当時ニュートンに代表される「科学」を取り込もうとすることはあっても、もはや「科学」と対立し、「科学」によって立場を弱くさせられる状況にあったとは思えない。遠く1215年制定のマグナ・カルタに遡る王と議会からなる「俗権」と、それから分離されたこの「聖権」は（ヘンリー八世によってイギリス国教会が設立されるのを待つまでもなく、教会はある程度政治権力からす

31 古矢旬、『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』, (2002), p.58.

に分離されていたと考えられる)、ともに大英帝国を支え、ニュートンが没したときには国葬の礼をつくし、ウェストミンスター僧院の主祭壇前の床に葬るほどの尊重ぶりなのだ。イギリスにおいてはもはや「科学」はキリスト教の敵ではなく国家を支えるものになっていた。

一方、この時期について古矢は「大覚醒」の時期とし、「イングランドやヨーロッパにおける信仰復興運動とも通底する<sup>32</sup>」と指摘する。アメリカではこの「大覚醒」が「福音主義的な熱狂」（素人の説教者たちが既成教会とプロの聖職者を批判し、野外集会で直接霊的覚醒をうながす）とあいまって、アメリカ独立革命を思想的に準備したとまでいえるかどうかは論争があるにせよ、「十九世紀以降の民主主義社会における世俗的ポピュリズムのパターンを創出したことはおそらくまちがちなだろう<sup>33</sup>」とする。このことを敷衍すれば、先述の、「ポーンアゲインといわれる大人になってからキリスト教を再確認して救われたためにキリスト教を文字通り信じるようになった人々」の宗教で、本当に歴史を遡り原始キリスト教に立ち返ったわけではなく「懐疑主義」に陥った現代人感覚からの脱却であり、「反・懐疑主義」とでも名付けた方がよいキリスト教原理主義がイラク戦争の一因としたことの、アメリカ建国に遡る思想的要因を突き止めたことにもなる。

アメリカについての古矢の記述を信用しても、そのこととイギリスの状況を並行させてとらえることはできない。独立宣言によってアメリカに「俗権」が樹立されたことは確かだ。そこではマグナ・カルタに似た「聖俗の分離」が理念として受け入れられていることも確かだ。けれど、アメリカには「聖権」と公式に表明できるものはないのではなかろうか。「大覚醒」「福音主義的な熱狂」は運動であって樹立された公式の「聖権」ではないし、「俗権」との分離が明らかではない。

この運動と通底する「信仰復興運動」なるものがイギリスの場合何を意味するのか古矢は具体的に名前を挙げないので判然としないものの、ニュートンの国葬を司る儀式を行った英国教会は公式の「聖権」であって、大きな教会までを守備範囲とする。チャペルなどのレベルでの様々な動きまで統括し、徹底した統治をするわけではない。また英国教会内部にも高教会派と低教会派の対立はあったし、そうした派閥レベルのことであれば、古矢の指摘するアメリカの宗教運動に呼応するものがイギリスにあったといえるかもしれない。けれど、アメリカの「大覚醒」「福音主義」は「反主知主義」のあらわれとの指摘<sup>34</sup>もあって（古矢はこの指摘の注で、「大覚醒」運動のなかに、最初に「反主知主義」の動向を指摘したのは、周知のようにリチャード・ホーフスタッターである、と紹介している。そのピューリツァー賞受賞の著者の手になる書

---

32 Ibid.p.58.

33 Ibid.p.59.

34 Ibid.p.59. (注はp.83)



物<sup>35</sup>は筆者も知っている。けれど、その指摘がアメリカ研究の専門家にとっても「最初」であったことは専門外なので知らなかった)、それならオックスフォード、ケンブリッジ両大学出身者で占められるイギリスの「俗権」(王権も議会も)「聖権」とは様子が異なる。

イギリスの場合は明確な「俗権」と「聖権」が、それもオックスブリッジ出身者の知性によって管理され、分離して存在するので、「内面の自由」の範囲内で様々な宗派活動ができる。アメリカには「聖権」が存在しないので、本来「内面の自由」のレベルのものが、「俗権」を支える陰の「聖権樹立運動」として、「俗権」の性格そのものを、果たして「聖権」と分離したものかどうか、疑念を抱かせるものになっているのではないか。

とはいえ、アメリカに本当に「聖権」は存在しないのだろうか。

例えば、かかりつけの臨床心理学のカウンセラーを置くことがステイタス・シンボルであったことに着目し、「心理学」をアメリカの「本尊も教団代表者もない陰のキリスト教」とみなし、その総体をアメリカにおける「陰の聖権」と考えられないであろうか。イギリス貴族は館内に教会かチャペルを持ち、かかりつけの僧侶を持つことがステイタス・シンボルであった。

「本尊も教団代表者もない陰のキリスト教」という考え方をするには、もう一つ古矢の指摘との関連がある。それは自動車会社のフォードが、かつて移民を受け入れる際にフォード英語学校を創設し、そこで「アメリカ人になるための教育」を行い、その卒業の儀式を紹介していることである。

「その卒業式では、卒業生が舞台上で、はじめ出身国の民族衣装のぼろをまとって移民船から現れ、中央にしつらえられた巨大な“るつぼ”のなかに消え、教師たちがその“るつぼ”を長いヘラをもってかき混ぜたあと、最後に移民たちがアメリカ式のよそ行き着に着替え、星条旗を手にして、ふたたびそこから現れるといった儀式がおこなわれていた<sup>36</sup>」と古矢はいう。

指摘したいのは、この儀式の宗教的な感覚である。カトリックの修道女になる女性が「俗界」の衣を脱ぎ捨て、「聖界」の尼の衣をまとう儀式を思わせる。カトリックに限らず宗教団体には似た儀式が行われる。「俗界」の衣を脱ぎ捨て、「聖界」の衣をまとう儀式は、およそ宗教と名のつくものにとって必然の儀式だからである。ただし、フォード英語学校の儀式が異なるのは、「入信」の儀式ではなく「卒業」の儀式であることと、儀式の中に宗教なら必須の「本尊への帰依」がないことである。

フォード英語学校で「フォード会社への忠誠心が吹き込まれ、さらには合衆国への帰化が勸奨された<sup>37</sup>」にせよ、それは何か特殊な領域に「入る」ことではなく、アメリカの企業に勤め

---

35 Hofstadter, Richard, *Anti-Intellectualism in American Life*, (1963).

36 Ibid.p.35.

37 Ibid.p.35.



る一般人（アメリカ生まれの中産階級のモラルを持つ人）になるための儀式であり、一般のアメリカ人が一般の学校を「卒業」して企業を選び、そこに入社する段階と同じ段階に移民を達せしめる儀式ではなかっただろうか。

もう一つこの儀式に酷似していると思われるのは臨床心理療法士によるロウル・プレイである。もし移民としてアメリカに渡り、様々な差別を受けてノイローゼになった人をロウル・プレイによって治療するとしたら、差別される側と差別する側との役割を交替しながら演じることをすすめることになる。初期の段階で「民族衣装のぼろ」を笑われ、英語が出来ないことを笑われた経験を再現し、「民族衣装のぼろ」を脱ぎ捨て、アメリカ人としての洋服の趣味を身につけ、英語に上達してゆく自分を、役割をかえて演じることで「アメリカ人としての」自信を身につけさせノイローゼを治癒する。その縮小版がこの儀式だともいえるのではなかろうか。

さらにカトリックの尼になる儀式とは別に、上記の移民がカトリック教徒であれば、カトリックの神父に告解して忠告を受けることに酷似していることを指摘したい。アメリカに渡って以来の苦労を神父に話し、なぐさめてもらうだけの話なので、やっていることは臨床心理療法士によるロウル・プレイと変わらない。自分の過去を振り返り、魂の底から思い返すだけのことである。カトリック教徒として幼時洗礼を受けていれば、その移民は「神との対話」の名のもとに、「神との対話」の思い出を辿ることで、ものごころついた頃にまで遡って過去を振り返ることが出来る。カトリックには「宗教的なエキュメニカルイズム」があるので、それを移民が信じる限り、カトリックの神父には臨床心理療法士と同様の信頼を、その移民から勝ち得ることが出来る。

ここでカトリシズムという「宗教的なエキュメニカルイズム」が支配し、心の問題を取り扱っていた西欧で、フロイト、ユングといった精神分析学の流れが市民権を獲得するには、カトリック教会への挑戦が必要で、ユングの著作にカトリック批判が頻出することも、このことを表している。と先述したことを、このフォード英語学校の儀式と関連付けたい。そこから見えてくるのは、精神分析学が大西洋を渡ってアメリカに来て、西欧キリスト教の影を背負っていることである。

ただしカトリシズムとフォード英語学校、臨床心理療法との違いは、キリストという本尊、ローマ法王という教団代表者がいるかないかということである。フロイト、ユングといった精神分析学の流れが市民権を獲得するには、カトリック教会への挑戦が必要だったということの意味は、端的に言えばカトリシズムからキリストという本尊、ローマ法王という教団代表者を取り除いたものが臨床心理学だということではなかろうか。

個人としてカウンセラーたる神父と向き合い、幼児体験に遡って自分を見つめるというカトリック教会が千年にわたって西欧の老若男女に告解聴聞の形で行ってきたことから、「神」を取り除き、神父を心理療法士に変えたのが精神分析学だとしても、そう事実から離れてはいな

いと思われる。

これをイギリス・ルネサンスの演劇史に重ねていえば、人間の欲望とモラルをめぐる葛藤を描く心理劇を、まず「聖劇」として上演し、そこから舞台上の登場人物として「神」ないしその化身を取り除いたのが「道徳劇」であり（この頃までは、まだイギリスはカトリック教国であった）、そこからさらに露骨な教訓臭を取り除いた（イギリスとローマ法王庁との対立、舞台でみだりに神の名を出すことの禁令により、徹底してキリスト教倫理の露骨な表現は消えた）のがシェイクスピア劇であった。とすればシェイクスピア作品が精神分析学の材料を提供することになったのは必然ということになる。

ここで「心理学」をアメリカの「本尊も教団代表者もない陰のキリスト教」とみなし、その総体をアメリカにおける「陰の聖権」と考えられないであろうかと先述したことを検討したい。

アーサー・ミラーの『墮落の後』を中心に、ユングの集合無意識と「影」の理論で解析できることを述べ、同じく『ハムレット』も個人に焦点をあてたユング理論で分析できることを言う論考<sup>38</sup>がある。マリリン・モンローと結婚、破綻を経験したミラーであり、マリリンはまさに精神分析が有効な性格の持ち主であった。『セールスマンの死』は、アメリカ人では個人としての誇りを失えば死を意味することをミラーが描いたとする分析は正しい。ハムレットが近代的悩みの象徴で、そこからフロイト、ユングと続く精神分析の系譜が始まる。指摘は正しくとも新味に欠ける論考が、なぜ二十一世紀にも表れるかは、アメリカという国家の抱える、個人の尊厳で成立する性質による。

つまり西欧人の個人の尊厳がキリスト教ぬきには考えられないように、アメリカ人の個人の尊厳は「心理学」「本尊も教団代表者もない陰のキリスト教」ぬきには考えられない面を示したということではないか。つまり「心理学」はアメリカの「陰の聖権」なのだ。それは昨今のキリスト教原理主義に姿を変えることもある。そして知性を否定する民衆の情熱に支えられている。

イギリスは封建体制を脱し、すでにあった「聖俗の分離」をオックスブリッジ出身者の知性によって「科学」との関係においても果たし、「内面の自由」を確保して、さらに近代化を進めた。アメリカは「科学」が台頭する啓蒙思想の時代にあっても、知性を否定する動きがあったため、「科学」と「宗教」との関係処理もうまくゆかず、「聖俗の分離」もイギリスほどはっきりしなくなってしまった。

米国シェイクスピア研究博士論文には、シェイクスピア、ジョンソン、ミドルトンばかりか、

---

38 Jordan, Ryde, *Individuation and the power of evil upon the development of the personality in selected works by C. G. Jung, Arthur Miller, and William Shakespeare*, (2003). CR||291||1

アフラ・ベンまで加え、17世紀英国の資本主義が封建体制を崩壊させていくことを、レヴィ・ストロースの文化人類学的視点や、各種の社会学、社会哲学、心理学的視点で考察した論文<sup>39</sup>がある。17世紀英国は、もはや封建体制崩壊の段階ではないし、資本主義が重商主義その他を介在させず直接封建体制を崩壊させるということも奇異に感じられる。そこに文化人類学的視点や、各種の社会学、社会哲学、心理学的視点という道具立てがあまりに仰々しい。こうした論文が書かれるのは、アメリカ自身を反映しているのではなかろうか。アメリカは「封建体制の次の段階」として建国し、現在もある意味でそうなのではなかろうか。それは知性を否定したため「聖俗の分離」がはっきりせず、「心理学」をアメリカの「本尊も教団代表者もない陰のキリスト教」とみなし、その総体をアメリカにおける「陰の聖権」とする仮説が成り立つ状況になってしまったからではないか。

プラトンからロラン・バルトまでの肉体論を展開する中で、『尺には尺を』など、シェイクスピアの作品もとりあげる論文<sup>40</sup>がある。「肉体論」は「心」について考えることの裏返しであり、いわば広義の「心理学」である。

「心理学」はキリスト教から「神」と教団代表者をとりのぞき、モラルの価値基準を捨象したように、「ヘブライ・ヘレニズム文化」基調の価値基準を崩壊させ価値基準以外の成果のみ盗みとる。「心理学」に価値基準があるとすれば、それは「内面の自由」ではなかろうか。

人を殺してはいけないとは「心理学」は決していわない。殺人者、殺人被害者の心理を分析するのみだ。そこには言外に殺人者であろうと、殺人被害者であろうと、それを眺める人々であろうと、人間である限り「内面の自由」は確保されるべきという価値判断があるともいえる。

アリストテレス的な「徳の基準」に対抗するようにペーコンの「金持ちの徳は穏やかさ、逆境の徳は堅忍不拔」がある。それにまた反論するように「情熱の奴隷でないような人間がいたら連れて来い」というハムレットの台詞がある。ペーコンは哲学的思索によって、シェイクスピアは情念の演劇によって「内面の自由」を求め、それは英国ルネサンス演劇の成果であって、建国の事情から知性を否定したために「内面の自由」がすぐに「外面の自由」にすりかわるアメリカでも、求めるものは同じともいえる。そのことは、特にあらゆるものから「神」と教団代表者ないしはその対応物を取り除きたがるアメリカの傾向になり、それは、次項の「ワークショップ（創造工房）」と関わっている。

---

39 Roh, Seung-Hee, *Determinate Contradictions in Seventeenth-Century Drama: Inheritance, Gender, and Exchange in Shakespeare, Jonson, Middleton, and Behn*, (1995). MF||189||72

40 Liberta, Angelo M., *In the Name of the Body: The Body in Discourse from Plato to Barthes and Beyond*, (1996). MF||194||7

(b) 枠にとらわれない米国流自由研究

机上の「文学」とは別に、「ワークショップ（仕事場の意味から演劇では準備段階での様々な活動，講習会をさす）の創造性」といったものが存在する。アメリカは国としてこの考え方を支持する。以下、この項目も「2001. 9. 11テロ」を勘案する以前に記述した考察に「2001. 9. 11テロ」を勘案して以降の考察を交えながら論考してゆく。

シェイクスピア自身もワークショップと関係が深い。演劇人だからであり、演劇はワークショップから生まれる。ペーコンも「科学実験室」という名のワークショップと関係していた。この二人のワークショップの質の違いを考察することはシェイクスピア＝ペーコン説検証に役立つ。

まず、シェイクスピアを中心とした英国の演劇を生む英国伝統のワークショップとは何かを確認するのに都合のよい「アメリカの」学位論文がある。

シェイクスピア作品の男性の役を女優がやることを問題にした論考<sup>41</sup>がある。フェミニズムではなくシェイクスピア作品解釈を豊かにする実験だという。まず、これが本当に「アメリカの」学位論文かどうかは疑問が残る。アメリカの大学で学位を取ったからということはさておき、往年の名優が実績を残した男性の役を女優が汚すといったシェイクスピアの普遍性に対する狭量さがクロス・ジェンダー公演へのネガティブな反応にあると見て、これを攻撃する論調は、英国の中流階級の知的な支配への反発の形になっていて、一見アメリカニズムの一環に見える。けれど英国バーミンガム大学を卒業し、シェイクスピア・インスティテュートで舞台を経験した著者は、現在の著名な演出家や女優が行ったクロス・ジェンダー公演を弁明する形で、その詳細な解釈を解説し、それはそのまま英国のすぐれた学術論文の記述を思わせる。英国の著名な演出家や女優の詳細な解釈を解説すれば、それはそのまますぐれた学術論文になってしまう。しかも文献とその引用の方式はすべて英国の感覚である。

一方、そうした作品解釈の高レベルな記述とは不似合いな記述が英国中流階級の知的支配への攻撃である。イギリスでのクロス・ジェンダーへのネガティブな反応に、過去に女優の登場で舞台が乱れ、英国秩序が乱れるといった論がなされたことを引用しての攻撃である。こうした論述には無理が感じられる。むしろ英国演劇はシェイクスピア以来絶えず実験を繰り返してきた実験工房の側面があったことを立証する論文になっていて、ただし、アメリカと違って実験工房には権威を持つリーダーがいることも示しているといえるのではないか。取り上げられた公演はすべて著名な演出家、女優によってリードされたものばかりである。

---

41 Klett, Elizabeth Theo, *Re-producing Shakespeare, engendering anxiety: Women's cross-gender performance and British national identity (William Shakespeare)*, (2003). CR||291||1

論文中、日本にも公演してその暖かな反応とクロス・ジェンダーに偏見を持たない日本の特性が指摘されている。歌舞伎と宝塚で、役柄の性と演じる役者の性が異なることには日本人が慣れきっているのは確かだ。けれど、それに加え、二十世紀末の日本の特徴という面があるのではないか。日本人は忘れ去ることが早く、二十世紀末にはギルグッドもオリビエも完全に過去の人になってしまっていた。この論文はフェミニズムともジェンダー問題ともあまり関係がなく、英国シェイクスピア研究の学界と演劇界を巻き込んだ一つの試みの波紋という面が強い。我が国になぞらえれば、例えば忠臣蔵の大石内蔵助を玉三郎が演じて、本気で歌舞伎座の舞台にかけたらどうなるかといったことに近い。玉三郎は「源氏物語」の光源氏もやれるし、もっと無骨な田舎侍もやれる。立女形として活躍する現在の技量なら、歌舞伎座で大石内蔵助をやって、内蔵助の別の面を引き出すことも可能である。立女形が立役をやるのはルール違反との伝統に基づく指摘はあっても、そうした配役自体へのネガティブな反応は少なく、そうした試みの演劇的展望を頭から否定する人はあまりいないかもしれない。けれど七十年代、まだ十一代目団十郎の演技を覚えている観客が多く、先代の松禄、幸四郎が生きていて玉三郎にも苦言を呈していた時代、この論文が指摘する女性がシェイクスピアの栄えある男性の役柄を僭取する不遜さをなじる立場に似て、立役でも内蔵助を演じるには十年早く、ましてや女形が何をするかと文句を言ったであろうことは想像に難くない。また文句を言われることと平行して、一方、当時なら、まだ若い玉三郎が眉目秀麗の若き貴公子風内蔵助を演じることは、かなりスキャンダラスで危険な香りを立てたであろう。これに似た状況が、この論文が取り扱うシェイクスピアをクロス・ジェンダーで演じることではないか。

この論考がいう「ブリティッシュネス」の狭量な解釈攻撃は、「ブリティッシュネス」をめぐる英国伝統の演劇実験工房内の論争に過ぎず、そうした論争があること自体英国演劇工房の豊かさをしめしている。

一方、米国シェイクスピア研究博士論文をながめると、「アメリカのワークショップから生まれた」と感じさせられる研究論文は多い。その中でペーコンのワークショップから派生したとして見れば領けても、シェイクスピアのワークショップの延長としては首を傾げざるを得ないものも多い。また「2001. 9. 11テロ」以降、かつては臨床心理学的にシェイクスピアを考察することで心の救いを得ていたアメリカ人が、臨床心理学よりキリスト教原理主義に乗り換えた現象が起こっていると先述したことが、この分類項目にも影響を与えている。

時間を「円環的」「直線的」に加え「預言的」を加えた三要素で分析した論考<sup>42</sup>がある。スペンサーの詩は「円環的」「預言的」でキリスト教的なのに対し、シェイクスピアは「直線的」

---

42 MacDonald, Julia Sanders, *The sense of time in Spenser and Shakespeare: "The Faerie Queene", "Macbeth" and "Hamlet", "The Winter's Tale" and "The Tempest"* (2003). CR||291||1

要素が強く、ギリシャ・ローマ的だという。理解しにくい論文ながら、作者は聖書を「円環的」「預言的」時間の流れる世界ととらえ、それを基準にしていると考えれば理解可能である。シェイクスピアがギリシャ・ローマ的とする意味は、おそらくシェイクスピアがギリシャ悲劇を念頭に作劇した面について、「預言」は出てきても、聖書に比べ「預言的」時間が流れるというほどの人知を超えた時間の流れる世界が開けている訳ではない点を指摘したものであろう。

ニュークリティシズムやバシュラールなどユング的心理分析を文学に応用する試みがすでに行なったことながら、聖書を読み解くことに人生の意味を探ろうとする試みそのままにスペンサーとシェイクスピアに挑むところが、アメリカの特徴として英国との違いが際立つ。マクベスをサタンと看做すところに偏狭さを感じさせるものの、例えばキリスト教を心理分析で捉えても「宗教」としての力を失わないアメリカの特徴を感じさせる。既成宗教を、聖書を武器に改革するのではなく、聖書から新たなキリスト教を構築する精神的土壌がアメリカにはある。それは昨今のキリスト教原理主義が注目される現象を生むのと同じ精神的土壌ではなかろうか。

同時にそれは「本尊も宗教団体代表者もない」キリスト教が成立する土壌でもあって、キリスト教もワークショップで信仰出来そうな感覚でもある。それを伺わせるのが、この論考ではなかろうか。

リア王が最後に本当のコーデリアを認識したように、『ペリクリーズ』、『シンペリン』、『冬物語』の幕切れを主人公が苦しみの末宗教的ヴィジョンに導かれて到達する心境で解析したもの<sup>43</sup>がある。『ヘンリー八世』のアラゴンのキャサリンの最期も同種のものととらえる。これなどは懐疑主義でもなければ西ヨーロッパ回帰でもない、改めてキリスト教的な宗教的ヴィジョンに帰依する心情をシェイクスピア研究にささげたものではないだろうか。

Gallows humorをシェイクスピアの作品について追及する、文字どおり処刑について考察するものがある。赦しも含め政治的というより宗教的な面もある論考<sup>44</sup>である。カトリックのイメージがあるかないかも論じるので、チャールズ一世処刑を強く連想させられる。枠にとらわれない考察がボーダーレスのアメリカの特徴を表す。ただし、シェイクスピアの演劇から処刑ばかりを集めるのは演劇構造の解体である。むしろ大法官ベーコンのエッセイなら処刑に関心を集中することもあり得るし、事実処刑を前面に出さずとも「裁判官の職権について」というベーコンのエッセイはこれに当たると思う。歴史、文学、法律のごったまぜの論考ながら、ベー

43 Reid, Jane Ellen, *Seeing 'heavenlie things': Dreams and visions in Shakespeare's final plays*, (2003). CR||291||1

44 Spencer, Janet Marie, *The politics of mixed-genre drama : the comic treatment of punishment spectacles in Shakespeare*, (1990). 930.28||Sh||Spen



コンがその一員でもあるシェイクスピア時代の知的サロンという「ワークショップ」の存在を想像させる。

ベーコンのこのエッセイではカトリックへの強い反感が示される。「裁判官たるもの、ローマ・カトリック教会が勝手に聖書をねじまげるように法をねじまげてはならない」といった調子でエッセイは始まる。西欧全体へのカトリックの精神的支配からイギリスが脱しようとする心意気を感じられる。ただし、ヨーロッパ大陸のシステムが厳密に体系だった法であることに比べ、英米法の慣習法や経験論的解釈が複雑に入り組む有様はまた独特のものであって、必ずしもベーコンの言い方が正しいとも言い切れない。「裁判官たるもの、イギリス人が勝手に法をねじまげるようにねじまげず、聖書と同じ価値を持つカトリック教会の神学のように厳密で体系だった法解釈を行わねばならない」と大陸の同時代の法曹界の誰かなら反論したかもしれない。問題はカトリックが支配した大陸とイギリスとどちらが正しいかではなく、強力な権威にすぎるのか、権威から脱しようとするのかということだと思う。

世捨て人の観点でエリザベス朝文学を解析し、『アセンズのタイモン』について、デカルトが「我思うゆえに我あり」に到達するとき自己の社会からの隔離が必要であったことと結びつけ、世間常識と真実の乖離が、タイモンのような登場人物を多く生んだエリザベス朝の社会的背景とする論考<sup>45</sup>がある。

世間常識と乖離した真実を追い求める科学者を風刺したシャドウウェルの『ヴァーチュオーソ』と同時期にシェイクスピアは清教徒による禁止を生き延びて復活した。そこから、あるいはタイモンは喜劇的人物としての演出も可能かと考えさせられる。つまり、ベーコンの考え方はインテリが支配するイギリス政界でこそ幅を利かせても、シェイクスピアが大衆も観客に取り込む演劇にするときには変人、世捨て人の設定をしなければ内容を語らせにくい「真実」ではないか。タイモンをデカルトとする論考は、ベーコンのエッセイを演劇化するときの設定としての世捨て人を考えさせる。

英国中流階級の文化は、ベーコンからフック、ニュートン、ファラデーへと自然哲学、自然科学の系譜を辿り、「ススンダ」変人と、それを揶揄しながら少なくとも排斥せずに追尾する文系のインテリによって発展していった。揶揄の手段も演劇であり、「変人」が「真理」を語る技法にも演劇的手法が取り入れられている。

ここに少なくとも英国中流階級の文化の視点からは疑問を感じないではいられないものの、そこに反逆しアメリカを夢見たベーコンならまだしも頷けるといった論考がある。カウボーイ

---

45 Darcy, Robert Farquhar, *Misanthropoetics: Social flight and literary form in early modern England* (William Shakespeare, Edmund Spenser, Ben Jonson), (2003). CR||291||1



とシェイクスピアを結びつける論考<sup>46</sup>である。

イギリスは「馬の地獄、召使の牢獄、女性の天国」と言われる傭兵の祖国であった。法体系を弄ぶ「貴族・僧侶の天国」ではなかった。このことは「(g) ホモセクシュアルに関わるもの」の項で詳述した。「馬の地獄」について言えば馬術の観点でシェイクスピア作品解析するものも、それだけなら英国の伝統研究になる。しかし、その背景にカウボーイ文化の視点があることを考えると、むしろ枠にとらわれない米国的考察の領域になる。

「2001. 9. 11テロ」を経験し、さらにロンドン地下鉄爆破同時テロ事件を経験し、英米の対応の違いを見せつけられると、たとえばロンドンの警官もまた英国中流階級の文化の視点に立つと考えさせられる。ロンドンの警官が階級として中流階級に属しているというわけではない。世界一優秀だといわれるのは捜査の俊敏さだけではなく人間理解の深さによる。そして特徴のある帽子を被り、ネクタイをきちんと締めた英国紳士たちなのだ。そうした警官たちの最高指揮官であるブレア首相は、イスラム全体への敵意の抑制を訴え、警官たちは貧民層の技術者を誤認射殺した。階級意識の温存と、報復にはしらない見識が同居している。

一方、イラクに出撃するアメリカ兵は、精神的にはカウボーイの子孫であり、カウボーイを護衛した兵士たちの子孫である。ただし、大東亜共栄圏を夢見た旧日本軍の感覚とは随分違っている。

サウス・カロライナの軍事学校「シタデル」の卒業者がサウス・カロライナ大学で学位を取ったもので、ヘンリー五世とタンバレン大王の軍人としての倫理を比較する論考<sup>47</sup>がある。軍隊の訓練が論文に反映している点が特徴である。例えば、ヘンリー五世というクリスチャンと、タンバレン大王という異教徒という登場人物設定の選択の違いが作品の描き方に反映しているという指摘について、不道德なマーロウと「エイヴォン川の白鳥」を同列視し「一息に比較」することを、「実証主義者の見解として許容しよう」<sup>48</sup>という形の述べ方をする。この論考の調子は、決して実証主義者を批判している訳でもなく、論考自体公平に様々な意見を比較検討している。それでも、シェイクスピアに対しては「エイヴォン川の白鳥」として敬礼すべき存在とし、一方マーロウに対してはいささか軽蔑の態度を取らずにはいられない軍人氣質が垣間見られる。このことと、オークランド紛争時にイギリス軍司令官がシェイクスピア詩集を携帯したとされることとで、旧日本軍と英米軍との感覚の違いを論じることが出来る。

というのは「敵を知り己を知れば百戦危うからず」とは日本で流布する孫子の兵法ながら、

46 Nelson, Barbara (Barney), *Shakespeare's use of horsemanship language*, (1991). 930.28||Sh||Nel

47 Eubanks, Charles David, Jr., *"Know ye not yet the argument of arms?": The evolution of warrior ethos in Elizabethan military theory and drama (Christopher Marlowe, William Shakespeare)*, (2003). CR||291||1

48 Ibid.p.170.

これは「己が正しく敵が間違っている」という信念は前提にして、戦略、作戦などの技術的なことと受け止められているのが日本での一般の感覚だし、旧日本軍の感覚でもなかったか。シェイクスピアの詩や劇作品は、「己が正しく敵が間違っている」という信念が前提になった感覚は存在しない。まずオークランド紛争時にイギリス軍司令官がシェイクスピア詩集を携帯したとされることについていえば、「相手が正しいか、自分が正しいかと問いかけ、相手の非、自分の非などを様々な角度から比較検討する」のがシェイクスピアの詩である。その「ああでもない、こうでもない」という論調の詩を携えて、果たして戦争になるのかという疑問があった。(正直、戦争にシェイクスピア詩集を携帯することは不思議であった。一体何に使うのだろうかと思う。「忙中閑あり」の状態でも作るつもりかと思う。けれど、そうした見方は日本の戦国武将以来の、いざ出陣となれば闇雲に突撃する精神から来る誤解であることが分かる。)

また上記の論考は、「不道德なマロウ、道徳的なエイヴオン川の白鳥」を対比する箇所はあっても、全体としては、例えば現在の自衛隊のサモア派遣問題に近いような「ああでもない、こうでもない」をタンバレンやヘンリー五世について述べたものである。

ここで「己が正しく敵が間違っている」という信念を前提にしなければ戦争は出来ないと考えることが、英米には必ずしも適用出来ないのではないかと考えてみたい。

かつてアメリカ映画に「西部劇」というジャンルがあった。西部開拓の中で、カウボーイとカウボーイを護衛する兵隊が正しく、アメリカ・インディアンは悪者という勧善懲悪の姿勢が貫かれていた。これがマーロン・ブランドの一言で風向きが変わり、現在の多文化主義の風潮の中でアメリカ・インディアンは悪者どころか、その呼称もネイティヴ・アメリカンと変更され、マイノリティーとして尊重さるべき存在となっている。

だからといって、このことが理由になってアメリカ軍の士気が落ちたという話は聞かない。つまり英米軍は戦争の大義の当否が軍隊の士気に影響しないとはまではいわないまでも、必ずしも決定的なことにはならない、世界でも稀な軍隊なのではなかろうか。これは、言い換えれば英米軍は「当面の大義」とは別に「根本的な大義」がある軍隊だとも分析出来る。

アメリカ・インディアン征服問題について古矢が「先住民排除の目的は、いうまでもなく土地の獲得にあった」とし、「土地、とくにこの新世界の土地は、神意によって耕作されるべく定められている」という神話と、「インディアンは定住地をもたぬ狩猟民である」という神話が「先住民にたいする土地収奪、条約違反、詐取、居住地からの追放を正当化した」<sup>49</sup>と指摘することが、この事情を表している。つまり、「西部劇」の勧善懲悪の論理は土地を得るための「当面の大義」に過ぎず、土地を獲得してしまえば、さっさと引っ込まれるものであって、アメリカ軍全体の士気には影響しないのだ。

---

49 古矢旬、『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』, (2002), p.11.

同様なことがベトナム戦争についてもいえる。現在ベトナムはアメリカ人観光客も受け入れ、アメリカ軍が敗退した戦場である旧南ベトナム地域も観光出来る。アメリカ国内には、かつての敵の大將であったホーチミンを再評価する動きさえある。このベトナム戦争の「当面の大義」と「根本的な大義」を分析して、「ベトナムの共産化を防ぐ」ということが、結局はときが経てばアメリカ軍全体の士気に影響しない程度のものに変化する「当面の大義」に過ぎなかったことは重要である。

その後の古矢の論考を追ってアメリカが世界を相手に戦争を継続する「根本的な大義」を求めても、アングロ・サクソン中心主義、反カトリシズム、反ラディカリズム、反ヨーロッパ的階級性など、そのときどきの「大義」は、ときが経てば移ろう「当面の大義」であったことが明らかになる。反共については専門家の意見が分かれるものの、上記の組み合わせで説明がつきそうな見通しは立てられる。つまりアメリカ側から見て、ソ連や中国の共産党支配がカトリシズム、ラディカリズム、ヨーロッパ的階級性の悪いところを集め、アングロ・サクソン中心主義が尊重する「自由」の敵に見えたから戦いを挑んだと説明できそうである。アメリカ民主主義の理念を掲げ反共を掲げて戦ったベトナム戦争の「大義」も、上記のように「当面の大義」であったとすれば、「根本的な大義」は見当たらないことになってしまう。

それにも関わらず、普通の軍隊ならとても戦争出来る士気を維持出来ないはずの状況で、アメリカ軍は戦い続ける。よく「ベトナム戦争に学ばない」とイラク戦争を批判する。けれど、アメリカはベトナム戦争だけでなく、インディアン相手の戦いからも学ばなかったのだ。つまり「間違った大義」を反省して、「二度と戦争しない」などということはアメリカ軍については無縁に見える。次々に「当面の大義」を差し替えながら世界を相手に二百年以上も戦い続けている。

「根本的な大義」を、アメリカ政治史を眺め、文化論を加味して考察しても、はかばかしい結論は得られない。むしろ現場の軍人の声から、シェイクスピア詩集やシェイクスピア論からの軍人倫理論にこそアメリカが世界と戦争する「根本的な大義」があるとしたら、奇矯に過ぎるであろうか。

シェイクスピア論からの軍人倫理論で、虚構の登場人物を実在のもののように扱うのは、ヘンリー五世の戦争責任を論じた論考<sup>50</sup>に類似する。それは虚構と史実を区別しないナイーブ過ぎる読みようで、これくらいシェイクスピアと息を合わせる読み方はない。そこに戦場にシェイクスピア詩集を持ち込む軍司令官の気持ちを推し量るヒントがあるのではなかろうか。

つまりアメリカ軍の「根本的な大義」は、国家全体を眺めてどうこうというより、「現場感覚」

50 Chang-seop Song, *The politics of desire : William Shakespeare's "history" and the question of subjectivity in "Richard III", "Richard II", "Henry IV", and "Henry IV II"*, (1993). 932||Sh||R3=So

の中にあるという見方がかなり有効ではなかろうか。「現場感覚」とはワークショップという考え方につながる。「現場感覚」を強調すれば、たとえファシズムに凝り固まった国家の軍隊でさえワークショップ的な感覚が混じり込む。ましてや英米はワークショップを強調する国柄なのだ。

つまりアングロ・サクソン民族はシェイクスピア時代頃から「海に乗り出す荒くれ男」のワークショップを、全世界相手に繰り広げたといえいいかもしれない。「海に乗り出す」方向は、やがて西部開拓のフロンティア・スピリットになり、シェイクスピア作品の背景にある、ペーコンによる「密かな文化革命」の精神を受け継ぐともいえる。

しかし、同じく東西インド会社による貿易で儲けようとする欲望とフォールスタッフの愛欲を重ね合わせるシェイクスピアの「海」と、カウボーイの開拓精神は、直接は結びつかない。

以下に挙げる「アメリカ流自由研究」のような論文は、英国中流階級の文化を様々な視点から解体するもので、英国本国のシェイクスピア的伝統に反逆し、ペーコンによる「密かな文化革命」の伝統になら合致しないでもないといったものである。

モラル、罪、性などに関わるエンブレムをロマンス劇から集めて論考するもの<sup>51</sup>がある。ロマンス劇をエンブレムで読み解くのは西ヨーロッパの伝統にたつものながら、モラル、罪、性などに関わるものを集める点に米国流自由研究の趣きがある。『冬物語』について、ピューリタンの批判にさらされた観点からその宗教的不道徳性としての演劇意識を解剖し、オートリカスの祝祭場面に食事がなく、最終の彫像場面に晩餐があることを指摘、カトリック的儀式との関連も指摘し、「空腹」と「無感覚」(anesthesia)、「食事」と「共感」(synesthesia)という語も使う、典型的な宗教、心理学混在のワークショップ感覚の批評的考察がある<sup>52</sup>。ハムレットの内面の問題(オエディップス・コンプレックス、ディレイなど)を、どこか犯罪心理学のように考察するもの<sup>53</sup>も同様である。

この人間の内面と外面の問題がアメリカでは深刻な問題になる。たとえ旧世界の住人でも、モラル、罪、性などに関わる時、人間の内面と外面の関係について考察せざるを得ない。けれど、旧世界の場合は、西欧であれば教会と国家がある程度の道筋をつける。国家が主として人間の外面的な部分を規定し、教会が内面を指導する。アメリカはまず旧世界の西欧国家群の支配を逃れて新天地を開拓し、「アメリカ」という国家は、必ずしも人間の外面を規制することを目的としたものではない。また、キリスト教ということでは西欧旧世界もアメリカもほぼ

---

51 Cho, Kwang Soon, *A study of emblems in Shakespeare's last plays*, (1990). 932|Sh|Cho

52 Moran, Andrew Damian, *The chapel and the gallery: Religion and theatre in "The Winter's Tale"*, (2003). CR||291||1

53 Russell, John Joseph, *Hamlet and Narcissus: on the relevance of contemporary psychoanalytic theory to Shakespearean tragedy*, (1991). 932|Sh|Ha=Rus

同じ信仰を持つ。しかし、内面をローマ・カトリックが千年以上支配した結果のような強い規制力がアメリカでも働くであろうか。

神の遍在はカトリックが古來說くところで西欧人は幼少より叩き込まれる考え方だ。しかし、人間の内面にも外面にも存在する神と、そうした神への祈りは、実際に悩みをかかえる個人の救済について考えると、西欧旧世界とアメリカでは違った様相になる。つまり教会と国家の西欧、心理学のアメリカという違いである。

シドニーの「詩の弁明」が実際の生殖以上の文学の機能をいうところから、ノースロップ・フライが否定し実作者が多く主張する生殖と文学の関係を本気で論考するもの<sup>54</sup>がある。ミルトンはホモ的な聖職者が支配する人々が生殖を盛んにし、シェイクスピアについては『恋の骨折り損』の禁欲的な冒頭の設定をその文脈でとらえるなど、ユニークな論考である。野蛮な武装集団に学問が必要で、戦うホモ的な中核と、生殖のような国家、国民発展の基本事項を示唆する。また食物で作品を解析し、タイモンは拒食症であるとし、『冬物語』の人間関係を『ソネット集』の食物の比喻で表された支配構造のように解析し、ヘンリー四世をめぐる父子関係も『じゃじゃ馬馴らし』も食物と支配関係で読み解けるとする論考<sup>55</sup>は実践的な臨床心理学か心身症治療と文学論の結合になる。

つまりアメリカのシェイクスピア研究は、心身症治療といった現代人の悩みを直接シェイクスピアにぶつける傾向がある。これを一笑に付すことは旧世界の住人がすることである。アメリカ人の心の悩み解決方法として様々に論じられる。それをまとめれば（１）祈り（２）自分との和解（３）内面と外面のつながりを意識することではなかろうか。

つまりシェイクスピアは米国の国家イデオロギーと深い関係にある。そのことを示すのは、エリザベス朝演劇でピューリタンを皮肉る現象を分析し、マーティン・マープルレイト論争にも関る国家イデオロギーのゆらぎを指摘した上で、そのことと米国におけるシェイクスピア教育の問題を並列させた論考<sup>56</sup>である。ピューリタンによる建国神話はあっても、その国家イデオロギーに統一させられるのではなく、むしろ多様性が国是（それがワークショップの考え方になる。つまり権威ある教師が存在しない学びの場を重要視する）であって、しかもピューリタンに興味を持たないではいられない米国の現状をよく捉えている。高校などの教育現場では、

54 Glimp, David R., *The Government of Generations: The Literary Formation of Populations in Sidney, Shakespeare and Milton*, (1997?). MF||198||10

55 Janes, Nanette Hazel, *Nurturing Process and the Creation and Stabilization of Self in Selected Workes of Shakespeare*, (1995). MF||189||34

56 Lucas, D. Matthew, *Antipuritan satire: The staged puritan threat in Elizabethan and Jacobean England, and, Shakespeare pedagogy: "Confusion now hath made his masterpiece!"*, (2003). CR||291||1

今なおシェイクスピアを教えねばならず、なぜシェイクスピアが偉大かと生徒に問われたら答えねばならず、一方、シェイクスピアに頻出するピューリタンを皮肉ることが、当時の英国の国家イデオロギーと絡んで重要なのだ。

これは学校を巣立った大人の精神状態にも影響する。悩みの場面で米国人はシェイクスピアに相談したくなり、それがそもそものシェイクスピア研究で学位を取る動機になっていることを隠さない論考も多い。

葬式とは限らず、死を嘆く場面をシェイクスピアの作品から集め、感情中心の分析を行う論考<sup>57</sup>がある。学部卒論レベルならどこの国でもありそうな研究方法ながら、それで学位が取れるところが米国ならではのなからろうか。

おそらく身近な人の死があって、その悲しみを乗り越えるためにシェイクスピア研究論文を書くということがアメリカでは認められるのだと思う。旧世界ではどれか一つに作品を絞らずに死を嘆く場面ばかり集めることは、あまり共感を呼ばないと思う。旧世界では身近な人の死を嘆く悲しみを乗り越えるために、祈るにしても、祈り方は宗派によって決まっている。嘆く自分自身との和解といっても、内面は教会の指導の下にあり、外面は国家が管理して久しい。内面と外面のつながりでいえば、確かにローマ・カトリックも英国教会も超越神を信じる。けれど、それがいつのまにかローマ教皇やカンタベリー大僧正もしくは英国王が頂点に立つ組織が支える神にすりかわることは否めない。

その組織から脱したアメリカでは神が超越神であるというより、超越するものであって初めて信仰の対象になる傾向もある。いわゆるトランセンデンタリズムである。非在存在（そこにはない虚のイメージ）をシドニー、シェイクスピア、エミリー・ディキンソンなどを材料に、読者、作者、愛しあう二人の関係を主に考察するもの<sup>58</sup>は屈折したトランセンデンタリズムを思わせる。

内面も外面も固定した規制がないことは、国家や教会の枠を超える思考習慣ばかりか、哲学のボーダーレス化も促す。ラカンやペーコン、ロック、アリストテレスなど交えたバロック芸術論で、ダンの詩や『嵐』もバロックで括るところに意味があると考えられる論考<sup>59</sup>は、人生哲学のボーダーレス化といった観を抱かせる。

これはアメリカの反映であると同時に、シェイクスピア自身、ローマ・カトリックの支配を脱し、ヘブライ・ヘレニズム文化の拘束からも自由になる精神的環境の中で、常に自分とは何

---

57 Kazarian, Albert I., *Shakespeare's representations of mourning in seven plays*, (1990). 930.28||Sh||Kaz

58 Martin, Maggie, *The Transcendental Element in the Absent Presence*, (1995). MF||189||46

59 Bornhofen, Patricia Lynn, *Cosmography and Chaography: Baroque to Neobaroque, A study in Poetics and Cultural Logic*, (1995). MF||189||16



かを問い続ける作品を生み出した解説になると思う。シェイクスピアは自分を問うという形で、当時の国家を問い、教会の精神的支配を問う思考をしていたともいえる。

シェイクスピアの『ソネット集』のテキストが、必ずしも著者、“I”で語られる主人公の詩人が一致したオーサーシップの概念でとらえられないことを論じることで詩論を展開する。それを他のルネッサンスのソネット（ペトルルカ、ドレイトンなど）にも適用する論文<sup>60</sup>がある。

「礼儀正しさ」を観点に、貴族であることと、紳士の概念のずれなどを歴史的に考察し、「礼儀正しさを説く文献」を手がかりに、ハル王子の成長や『十二夜』を読み解く、イギリスの自己知論や成長論を、大陸的カトリシズム背景の考察に置き換えたような議論をする論文<sup>61</sup>がある。『ペリクリーズ』をめぐるオーサーシップ、作品の評価など、様々な問題を、19世紀、20世紀に絞って著名な英文学者、批評家の意見を中心に、まとめたもの<sup>62</sup>がある。英国人にとって内面も外面も規制されるマナーを、マナーに規制されないアメリカ人が論評することで、個人と国家、個人と広い領域を支配する教会の関係を迫及したものともいえる。

『ルクリース』『タイタス・アンドロニカス』だけでなく、シェイクスピアの詩的表現の根幹に「強姦」（レイプ）があって、「略奪愛」（ラヴィッシュメント）と女性の同意を無視し女性を家父長の財産とみなす法体系では同一視され、『オセロ』や『マクベス』（ダンカン王殺しが、まるでタルキンがルクリースを強姦したように描かれる）にまでそうした考察対象が広がるとする論考<sup>63</sup>がある。男性の性欲はその都度充足するのに女性の性欲は悪魔でさえ満足させられないので女性を魔女とみなす取り扱いが出てくる、といった観点から、シェイクスピアの初期のコメディを分析。祭りで終わるのは男性の性欲充足を隠しているといった鋭い指摘をする論文<sup>64</sup>もある。

こうした男女の性欲、特にレイプくらいアメリカ人が悩みの解決法として持ち出す「自分との和解」に密接に関わるものはない。古来西欧キリスト教が原罪として根源的な問題にしてきたことではある。けれど、ローマ・カトリックやイギリス国教会といった組織から離れ、アメリカの広大な自然の中で超越的な存在と対峙し、同時に世界を相手にテクノロジーを武器に市場経済を制し、軍事大国として君臨する国の個人の悩みとしてみれば、スケールと迫力が増す。

60 Cusk, Sarah, *Scattered Readers, Scattered Rhymes: Authorship, Publication and the Renaissance Lyric Sequence*, (1997).MF||194||6

61 McCarney, Margaret R, *Renaissance Courtesy Theory and Development of English Drama*, (1995).MF||189||81

62 Skeele, David Bradley, *"Thwarting the Wayward Seas": A Critical and Theatrical History of Shakespeare's Pericles in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, (1995).MF||189||83

63 Faherty, T. J., *Shakespeare's Poetics of Ravishment*, (1995).MF||189||60

64 Handelsman, Hilary, *Death and Disire/power and Eros in Shakespeare's Comedies*, (1995).MF||189||73



原作以上の迫力を付与する点がアメリカのシェイクスピア研究にあるともいえる。

これらはすべてシェイクスピアの作品ではなくペーコンのエッセイと結びつけて論じた方がより説得力を持つと私には思われる。つまり着想が部分的にすぐれていても収斂する旧世界文学としての価値基準がないので悪く言えば「シェイクスピアをめぐる思いつきの羅列」になる。それならシェイクスピア的伝統という英国中流階級の基準に反逆する革命性をペーコンから得て、それで新たな基準を設けたらと思う。言い換えれば科学技術立国の国が文化を見る視点への収斂ということであって、その祖はペーコンなのだ。

科学技術立国の国とは、軍事科学技術を武器に個人が自立する集団として、国家統制を最小限に留めたものでもある。それは銃社会の悲劇によく現れている。ふざけておもちゃの銃で脅した娘を父が射殺する事件があっても銃社会であることを止めないのがアメリカである。親子である前に銃を持つ個人であることが優先される。銃とは最も簡素な軍事科学技術としての武器ではないか。新世界と旧世界の区別は、国家、家族が天与の前提になるか否かである点を改めて認識させられる。

「自然な」兄弟姉妹と、そうでない、つまり人工的な「兄弟姉妹」の区別が曖昧になる点に、アメリカ社会の「人工性」が浮き彫りになる論考<sup>65</sup>がある。実の兄弟だけでなく、『夏の夜の夢』のヘレナとハーミア、『尺には尺を』のイザベラとイザベラが目標とする聖女、果ては『冬物語』のレオンティーズとポリクシニーズまで、登場人物の類似性と類似性があるがゆえに相違点で対立が深まる関係をすべて「兄弟、姉妹」の観点で整理した論考である。同一両親から生まれた自然な兄弟と、そうでないものの区別が、疑いの余地がない前提にならないところに特徴がある。

そうしたアメリカがはっきり見える形で収斂すべき価値基準を持つとしたら、アメリカが世界に誇る藝術としての映画であり、アメリカには「映画的なヒューマニズム」という価値基準があるのかもしれない。それを考察することはシェイクスピア＝ペーコン説検証にも役立つ。つまり「シェイクスピアがペーコンを利用した」という考え方が生まれる基になる。そのことは次項に譲り、また稿を改めたい。

---

65 Tedrowe, Emily Gray, "A natural perspective, that is and is not": The rhetoric of siblings in Shakespeare's comedies, (2003). CR||291||1